熊本県文化財調査報告　第70集

下井手・前田遺跡

―――荒尾市関川流域公害防除事業に伴う文化財調査―――

1 9 8 4

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第70集

下井手（しもいで）・前田（まえだ）遺跡

―― 荒尾市関川流域公害防除事業に伴う文化財調査 ――

1 9 8 4

熊本県教育委員会

序　　文

この報告書は、熊本県教育委員会が県農政部の依頼を受けて行った、荒尾市関川流域特別土地改良工事に伴う下井手・前田遺跡調査の記録であります。

この報告書発刊にあたり、埋蔵文化財に対する認識と理解が深まり、さらに学術研究上の一助となれば幸いです。

なお当遺跡の調査にあたり、県農政部、荒尾市農林課、荒尾市教育委員会をはじめ、地元荒尾市農協平井支所及び地元の皆様のご協力に対し深く感謝します。

昭和59年３月

熊本県教育長　外　村　次　郎

例　　言

1．この報告書は、荒尾市関川流域公害特別土地改良工事に伴って調査を実施した、荒尾市下井手・前田遺跡の報告書である。

2．発掘調査は、熊本県農政部の依頼を受け、県教育委員会が実施した。

3．現地での調査は、県文化課参事緒方勉が担当し、文化課嘱託河北毅が随時協力した。なお遺物写真については、文化課臨時職員渡辺正一が撮影した。

4．この報告書の作成には緒方が当り、整理には県文化財収蔵庫の皆さんの協力を得た。

5．この報告書の執筆は緒方が行なった。

6．出土遺物について一連の番号を付し、個体識別を容易になしめた。また図版中の番号は挿図中の番号と同一にした。なお出土した和鏡については、東京国立博物館考古課主任研究官関秀夫氏に知見を求めた。

7．本報告書の編集は緒方が担当した。

本　文　目　次

一　序　　説 …… 1

1　調査に至るまで …… 1

2　調査の組織 …… 3

3　下井手・前田遺跡の位置と環境 …… 5

二　調査の経過 …… 6

三　調　　査 …… 11

1　試　掘　（第２図） …… 11

2　塚１とその周辺　（第４図） …… 12

(1)　塚１周辺の土層層序（第４図） …… 12

(2)　塚１西側拡大区（第３・４・５図） …… 19

上位遺物包含層及び土坑（第５・６図） …… 19

下位遺物包含層（第７図） …… 19

(3)　塚１と西側拡大区出土の遺物 …… 20

3　塚２と地下検出遺構（第19・20図） …… 35

(1)　塚２の試掘と土層断面（第21図） …… 35

(2)　盛土下検出遺構（第20図） …… 39

(3)　塚２盛土中出土遺物（第22～27図） …… 39

4　塚　３（早馬さん） …… 48

(1)　塚３周辺の土層（第29図） …… 48

(2)　塚　３　（第28・29図） …… 48

(3)　塚３出土遺物　（第30・31図） …… 51

四　下井手・前田遺跡調査のまとめ …… 54

付　論

荒尾市下井手・前田出土の蓬莱双鳥鏡……東京国立博物館　関　秀夫 …… 58

挿　図　目　次

第１図　下井手・前田遺跡の位置と周辺主要遺跡 …… 2
第２図　下井手・前田遺跡周辺図 …… 4
第３図　下井手・前田遺跡塚１周辺トレンチ配置図 …… 13
第４図　塚１周辺各トレンチ土層断面 …… 14
第５図　塚１西側拡大区上層遺物出土状況 …… 15
第６図　土坑と遺物出土状態 …… 16
第７図　塚１西側拡大区下位遺物出土状況 …… 17
第８図　下井手・前田遺跡出土遺物１（塚１周辺上層）…… 24
第９図　下井手・前田遺跡出土遺物２（塚１周辺上層）…… 25
第10図　下井手・前田遺跡出土遺物３（塚１周辺上層）…… 26
第11図　下井手・前田遺跡出土遺物４（塚１周辺上層）…… 27
第12図　下井手・前田遺跡出土遺物５（塚１周辺上層）…… 28
第13図　下井手・前田遺跡出土遺物６（塚１周辺上層）…… 29
第14図　下井手・前田遺跡出土遺物７（塚１周辺上上層 下土坑中）…… 30
第15図　下井手・前田遺跡出土遺物８（土坑中）上鉄器 下滑石製連坏 …… 31
第16図　下井手・前田遺跡出土遺物９（土坑中）鏡 …… 32
第17図　下井手・前田遺跡出土遺物10（塚１盛土中）…… 33
第18図　下井手・前田遺跡出土遺物11（塚１周辺下層）…… 34
第19図　下井手・前田遺跡塚２・３周辺トレンチ配置図 …… 36
第20図　塚２地下遺構 …… 37
第21図　塚２土層断面 …… 38
第22図　下井手・前田遺跡出土遺物12（塚２盛土中）…… 42
第23図　下井手・前田遺跡出土遺物13（塚２盛土中）石塔１…… 43
第24図　下井手・前田遺跡出土遺物14（塚２盛土中）石塔２…… 44
第25図　下井手・前田遺跡出土遺物15（塚２盛土中）石塔３…… 45
第26図　下井手・前田遺跡出土遺物16（塚２盛土中）石塔４…… 46
第27図　下井手・前田遺跡出土遺物17（塚２盛土中）石塔５…… 47
第28図　塚３（早馬さん）盛土撤去後の状況 …… 49
第29図　塚３周辺土層断面図 …… 50
第30図　下井手・前田遺跡出土遺物18（早馬さん）…… 52
第31図　下井手・前田遺跡出土遺物19（早馬さん）…… 53

図 版 目 次

図版１　下井手・前田遺跡景観（上　西から・下　東から）
図版２　下井手・前田遺跡の試掘
図版３　塚１発掘前（上　北から・下　南から）
図版４　下井手・前田遺跡塚１周辺土層
図版５　塚１西拡大区上層遺物出土状態１（上　南から・下　南西部分）
図版６　塚１西拡大区上層遺物出土状態２（上　北西から・下　北から）
図版７　西拡大区発見土坑
図版８　西拡大区土坑内出土遺物（上　鏡その他・中　滑石製連坏・下　小皿）
図版９　西拡大区下層遺物出土状態（上　上層と下層の関係が知れる　下　下層）
図版10　塚２の調査（上　塚２発堀前のお祓い・下　塚２東トレンチ東から）
図版11　塚２の発掘１（上　東北側・下　西南側）
図版12　塚２の発掘２（上下　土層断面にあらわれた五輪塔）
図版13　塚２の盛土下検出遺構１（上　東から・下　北から）
図版14　塚２の盛土下検出遺構２（上　１号土坑・下　石敷）
図版15　塚３北トレンチの上層（上　南から、下　東から）
図版16　塚３（早馬さん）の発掘１（上　周辺試掘南から　下　盛土の½カット状況）
図版17　塚３（早馬さん）の発掘２（上　基底部の½カット　下　基底部の状況）
図版18　塚３（早馬さん）の発掘３（上　発掘完了　下　発掘完了後の確認）
図版19　下井手・前田遺跡出土遺物１（青銅鏡・鉄器　小形滑石製品）
図版20　下井手・前田遺跡出土遺物２（土坑出土遺物）
図版21　下井手・前田遺跡出土遺物３（須恵器）
図版22　下井手・前田遺跡出土遺物４（須恵器）
図版23　下井手・前田遺跡出土遺物５（須恵器）
図版24　下井手・前田遺跡出土遺物６（須恵器）
図版25　下井手・前田遺跡出土遺物７（須恵器）
図版26　下井手・前田遺跡出土遺物８（須恵器）
図版27　下井手・前田遺跡出土遺物9（須恵器）
図版28　下井手・前田遺跡出土遺物10（下層出土土師器）
図版29　下井手・前田遺跡出土遺物11（土師器）
図版30　下井手・前田遺跡出土遺物12（弥生式土器）
図版31　下井手・前田遺跡出土遺物13（青磁・白磁・擂鉢・石鍋）
図版32　下井手・前田遺跡出土遺物14（五輪塔）
図版33　下井手・前田遺跡出土遺物15（五輪塔）
図版34　下井手・前田遺跡出土遺物16（五輪塔）
図版35　下井手・前田遺跡出土遺物17（五輪塔・宝塔）

図版36　荒尾市の早馬さん１
図版37　荒尾市の早馬さん２
図版38　和鏡１
図版39　和鏡２
図版40　和鏡３

一　序　　説

1　調査に至るまで

熊本県農政部（主管課耕地二課）が公害防除特別土地改良事業を計画している荒尾市下井手地区について、熊本県教育庁文化課は昭和57年11月29日付けで、現地を踏査してみるよう文書（教文第535号）をもって県玉名事務所長宛に通知した。昭和58年２月に至り、県玉名事務所長より県教育長宛に埋蔵文化財についての発掘依頼（玉名耕二第309号）が届いた。それによれば

1　所在地　荒尾市下井手・前田347、349、393

2　遺跡名　早馬塚ほか

と記されていた。

これを受けて、文化課より松本健郎・高谷和生両技師が現地に派遣されることになった。

現地踏査は、58年３月１日、両技師のほか、県玉名事務所耕地二課（大石係員）、荒尾市農林課（中川係員他１）、市教育委員会社会教育課（本山係員）および市文化財保護委員（福島委員長）らの立会いのもとに実施された。その結果は直ちに県文化課内に報告された。

「関川左岸の水田中に下記のような塚が３基確認された。１、水田の真中に２ｍ四方、高さ約40cmの小塚がある。２、１の東約15mの畦の部分に長さ約10m、幅４ｍ、高さ１ｍの塚があり「早馬」と書いた石祠がある。この石祠は、もとは１の場所にあったという。また、塚の上には五輪塔（火・地輪）があった。３、２の東北方約50mに長さ７～８ｍ、幅４ｍ、高さ１ｍの塚がある。水田の真中にあるが、表面には何もない。」

更に、「工事区の南側・県道寄りの水路から土師器・須恵器・瓦器など約30点を採集した。平安時代と鎌倉時代のもので、この時期の包含層があるものと考えられる。」

との課内への報告を受け、文化課として58年３月５日付けにて、県玉名事務所長及び荒尾市教育長宛に次の内容のことを通知（教文第672号）した。

1　早馬塚については、工事に当って事前の発掘調査が必要です。

2　下井手地区については、土器片等の遺物包含層が認められますので、遺跡範囲確認のための試掘調査が必要です。

3　以上のことについて、県教育委員会と協議してください。

以上のような経過の後、耕地二課より予算の令達を受け、下井手・前田遺跡の試掘及び各塚の発掘をすることになった。

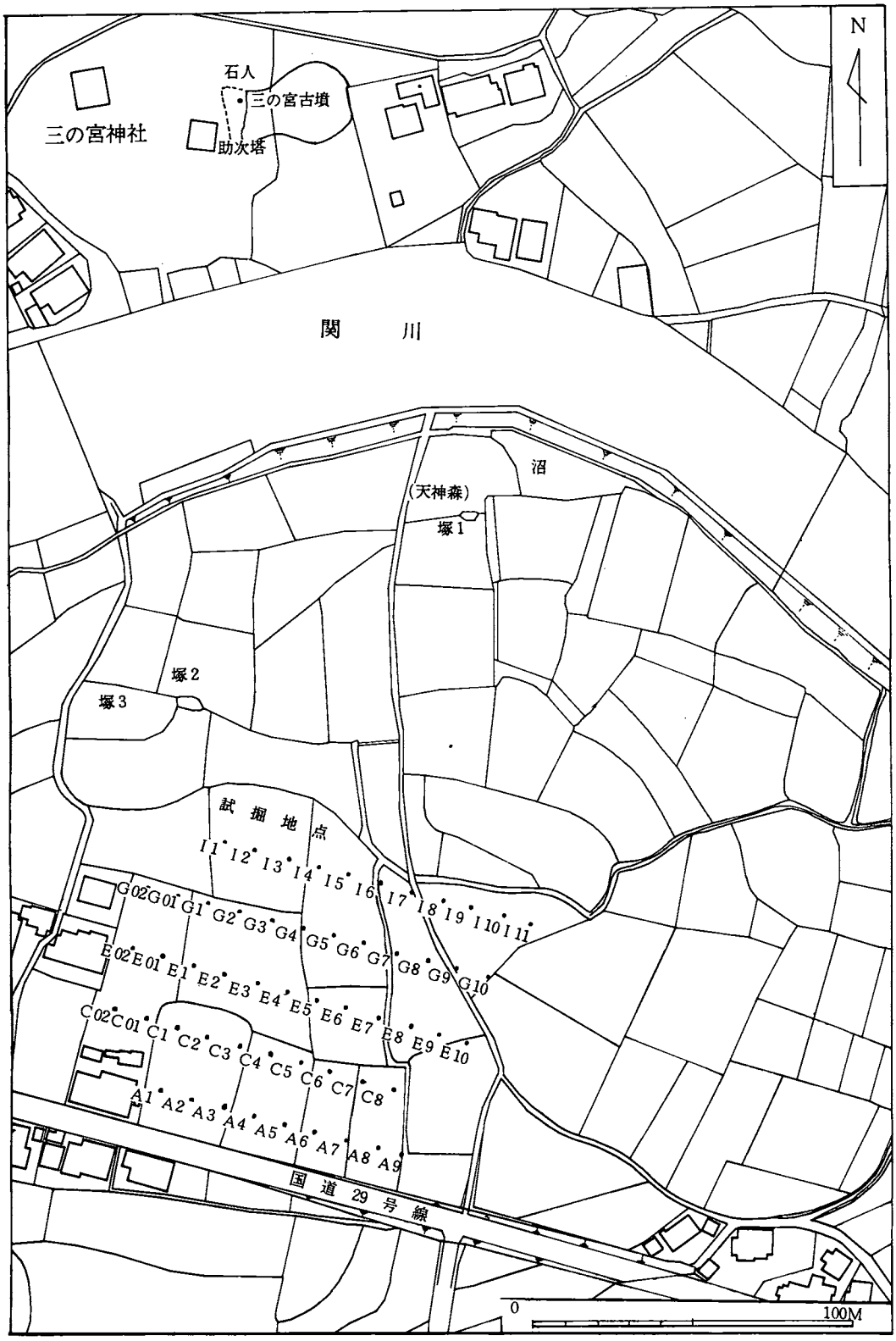
2　調査の組織

調査責任者	前文化課長	岩崎　辰喜
	文化課長	米村　嘉人
	文化課長補佐	林田　茂一
	主幹文化財係長	隈　　昭志
調査事務担当者	文化課主幹経理係長	大塚　正信
	文化課参事	松崎　厚生
	文化課参事	花田　隆二
	文化課参事	横尾　泰宏
	文化課主事	谷　喜美子
	文化課技師	西沢　八朗
	県玉名事務所	
	耕地二課課長	西坂　利明
	団体営係長	有田　宏介
現場担当主査	文化課参事	緒方　　勉
	〃　嘱託	河北　　毅

調査協力者　荒尾市農協平井支所
荒尾市役所農林課
荒尾市教育委員会
下手手・古庄原及び助丸の皆さん
福島作蔵氏　三島　格氏

1	下井手・前田遺跡	7	浮業寺
2	三の宮古墳、三の宮神社（石人・助次塔）	8	浮光寺跡
3	別当塚古墳群	9	グリーンランド窯跡群
4	四山古墳	10	龍宮社古塔群
5	田次郎丸居館跡と東光寺	11	聖人原板碑
6	下西田五輪塔	12	足手荒神石塔

第１図　下井手・前田遺跡の位置と周辺主要遺跡



第2図　下井手・前田遺跡周辺図

3　下井手・前田遺跡の位置と環境

本遺跡は行政区分のうえから、熊本県荒尾市大字下井手字前田に属する。踏査により三基の塚の存在が確認されている。最東に位置する塚（以下本文では塚１とする）が393番地、ついで塚上に「早馬」の石祠をもつ塚（以下本文では塚２とする）が347番地、さらに塚２の西側に位置する塚(以下本文では塚３とする)が349番地である。これらの塚の位置を国土地理院発行五万分の１図（昭和48年編集）「荒尾」に求めれば、図幅の北より約４㎜、西より約5.9㎝のあたりに相当する。

下井手・前田遺跡は三基の塚及び、その周辺より発見された遺跡（遺構を含む）とすれば、福岡、熊本の県境に沿って西流する関川ぞいにあり、川の蛇行する左岸に立地する。遺跡の南端には国道29号（荒尾・南関）線があり、道路沿いに古庄原、助丸の集落がある。ここはあたかも遺跡の東南約５㎞に聳える小岱山(501m)の山裾にもあたり、複雑な地形を形成している。

下井手・前田遺跡の周辺には関川を距てた対岸に三の宮（下井手・前田遺跡との距離100m余）がある。この神社は野原八幡宮の末社であり、この付近下井手の氏神でもある。この境内東端には三の宮古墳（前方後円墳）があるが、神社墳内には三の宮古墳の武装石人（国指定重美）も保管されている。また正平八年の「助次塔」も見落すことは出来ない。三の宮古墳の東約400mの地点には萩尾古墳(福岡県大牟田市)がある。この古墳は国指定の装飾古墳で、隣県ではあるが古墳分布のうえから見落すことは出来ない。本遺跡の西南約500mの山腹には深瀬山窯跡から須恵器が発見されており、東南約600mの丘陵上には別当塚東及び西の古墳がある。とくに東古墳は、割石小口積みの堅穴石室をもつ古式の古墳として、この道の研究者の注目するところである。

下井手・前田遺跡と関連づける意味において、荒尾市における古代・中世遺跡の分布は質量とも豊富である。数々の城跡、居館址、小岱山麓に謂集する古代製鉄址と枚挙にいとまない。また、賀庭寺をはじめ浄業寺、宗善寺、東光寺に遺存する塔碑類についても、すでに地元荒尾市教育委員会発行の『荒尾の風流』[注1]には遺跡の一覧として、また『大園山・杉谷遺跡』[注2]にもくわしく周辺遺跡の一覧が記されている。本稿では重複を避けてあらためて付言をしない。

注１　『荒尾の風流』　風流節頭保存会発行　昭和56年

注２　『大園山・杉谷遺跡』　荒尾市教育委員会発行　1978年

二　調査の経過

下井手・前田遺跡の調査の経過について、調査時のメモや日誌の中から抄出することにする。

58年6月17日　金　くもり　調査準備のための打合せを荒尾市の現地でする。その際、公害田における発掘、調査方法を含めて汚染土の処置について検討する。併せて地元に対して、作業員の手配をお願いした。

6月21日　火　雨後くもり一時晴　試掘予定地の杭打ちを実施する。公害田改良工事のため上土と心土を反転する地区に限り試掘を実施することになるが、東西は10m間隔に、南北は20m間隔に試掘予定地をセットする。

6月22日　水　晴　前日に引続き杭打ち、それと湿田のところは水切り作業をする。発掘は最も国道に近いところの、A－1（各試掘地点は1m四方）から順次A－2、A－3と掘りはじめた。本日の試掘はA－6まで掘ることが出来たが、およそ次の様な土層層序であることが判明した。第Ⅰ層の表土、即ち水田耕作土は18～19cm、この層は粘質の暗黒色土である。第Ⅱ層は2～4cmの水田特有の鉄分沈積層があり、その下に明黄褐色の花崗岩霜乱土があった。今日のところ、遺構の徴候はおろか、一点の遺物も出土しなかった。

6月23日　木　晴　試掘を効果的に実施するため、南北方向は20mの間隔をあけA列についでC列、C列についでE列を発掘することにする。本日はA－7、A－8及びC－1～C－6、南北主軸の西側C－01、C－02と掘ったが土層に大きな変化はなかった。そこでD列をとばしE列を発掘した。作業能率もあがりE－02～E－6まで発掘が進んだ。さらにG－5、G－6と発掘し、多少の土層の変化があらわれた。G－6では約15cmの耕作土の下に層厚約7cmの褐色土があらわれた。この土は上からの汚染土で、多少とも遺跡の気配がしてきた。この日作業員の話の中から意外な聞き込みがあった。話の内容は「この地区の水田下に万田炭坑の坑道が走っている。その影響を受け陥没田が多い」と言うことで、この附近の地形・地層を観察する上に充分注意を要する事項である。

6月24日　金　晴　土層の観察を終えた各試掘地点は、公害拡散を防止する上からも遂次埋戻を実施した。発堀はE－7、G－1～4及び、G－01、G－02と作業を進める。ここでも土層について厚薄の違いはあっても基本的な変化はなく、それが遺構検出に連なるものは発見出来なかった（G－4の試掘地点の土層断面には浅い溝状のものが検出されたが、水田面を観察すれば北西より南東にかけて東への段落ちとなっていて、勿論、年代がさ程遡るものではない）。

6月28日　火　くもり時々晴　前日は午后雨で水没のため作業中断、本日はⅠ列を精力的に発掘。Ⅰ－1～Ⅰ－8まで発掘するがⅠ－1～Ⅰ－7までの作業が進む。ここではⅠ－7の東断面に、耕土下に径20cm位の小ピットが検出されたのみで顕著な遺構は発見されなかった。

本日午后、早馬さんのお祓いをすることになった。早馬さんは、元々塚3のところにあった

が、水田耕作者の都合で石祠が塚２のところに移転された。そこで塚盛土とその周辺を清掃することにした。午后２時頃に司祭の三の宮の宮司も見え、地元農協、県玉名事務所耕地二課職員、市農林課職員、市教委社会教育課職員をはじめ、地元農民及び作業員等18名が作業の無事を祈って玉串を棒げた。

6月29日　水　くもり　Ｉ－８～Ｉ－12及びＧ－７～Ｇ－９まで発掘。Ｉ－11では１層の下1′層（層厚６～９㎝）からはじめて遺物が出土した。出土したのは近世陶片（蓋か）と須恵器（底部）の各１片づつで、この状態では周辺に遺構の検出されることは期待は薄いと判断した。他の土層観測、そして写真撮影を終えた試掘穴は隨時埋め戻した。

6月30日　木　晴　本日も埋め戻しと発掘を平行して行う。Ｅ－９とＥ－10を新たに掘る。また本日より「塚」の周辺を試掘することにした。３基の塚状の盛土が古墳ではないということは、現況を観察しただけでは決定づけられないので、塚の周辺にトレンチを設定することにした。そこで、取りあえず塚２の西と南の水田面から掘りはじめた。結果的に塚２の西と南の試掘溝には、古墳に見られるところの周溝といったものは発見出来なかった。

7月4日　月　くもり　最も東側に位置する塚状の盛土（塚１）についても、塚２と同じく盛土の四方にトレンチを設定した。東・西・南・北それぞれ10m余の発掘を試みたが、東と南・北に大きな地層の変化はあらわれなかったが、西のトレンチから部分的にかなりの量の土器が出土した。出土遺物は大部分が土師器で、これまで単調な発掘を繰返していたがこれを契機にして調査に弾みがついた。

またこの日は、塚２の周辺のトレンチと平行して盛土の発掘をはじめた。¼カットの方式をとり、東南と北西部を残して水田面の高さまで掘ることにした。発掘後の観察によると、塚の下の砂層がいく分高くなり、その上には約50cmの厚みの混礫土層があった。この混礫土層は大小不揃の礫が大部分で、中には近世陶磁片、土師器や須恵器片、或は現在に及ぶガラス片やビニール等の廃棄物まで含まれていた。

時折、市の農林課の職員や社会教育課の本山主事があらわれた。市の文化財保護委員長の福島作蔵氏は連日のように現場にあらわれ、調査についての助言や情報を提供した。塚２とせるところについては、「〻矢差し〻と言って、小岱山から弓矢を射ったところ、ということを家の婆やから聞いている」とのことで、ここにも伝承のあることを知ることが出来た。

６日には塚２の¼カットの土層断面の実測を続け、７日になって残りの盛土を発掘した。この盛土の中には、砂礫のほか須恵器破片、ガラス瓶、擂鉢片、さらに近世瓦もあらわれ、塚２の遺構としての性格がいよいよ判らなくなった。

7月8日　金　くもり　これまで作業員が毎日、或は数日毎に交替していた。そこで地元の圃場整備担当役員に「頻繁に作業員が替っては仕事の継続上困る」と善処方を求める。もっとも地元にはそれなりの事情があってのことであろうが、その中の何人かは継続して欲しいと希

望を伝える。作業は本日も塚１の盛土の発掘と、先日中断した塚２の西、南のトレンチの発掘を再開する。

7月11日　月　快晴　塚２では北・東トレンチと平行して盛土の部分を¼カットをはじめる。またこれと平行して塚３にも周辺にトレンチを入れることにした。

7月12日　火　晴　塚２の各トレンチ断面実測、塚３では北トレンチの一部を深掘りして、土層層序を観察の便宜をはかる。地表下1.4m掘り下げたところで５層に分れていることが知れる。即ち、耕土の下に砂質土、この下に粘質土が三枚あり、それぞれ色調を異にしていた。これらは恐らく、関川の氾濫に基因しての堆積土とみられた。塚１では盛土撤去の後、地下に埋没遺構の確認を急いだ。その結果、墓坑その他の埋設遺構のないことがはっきりした。しかし、中断したままになっている西トレンチの遺物の始末である。この一帯は公害防除の土地改良の手段として、客土する地域ではあるが、折角顔を出した遺物の性格を究明しておく必要に迫られた。そこで範囲をしぼって発掘することにした。

7月13日　水　晴　本日は福島氏の他、肥後考古学会長の三島格氏が来訪した。そこで塚１撤去後の遺構の検出について智慧を貸してもらった。竪穴状のプランの一部が現れたが、どうも曖昧ですっきりした状態でなかった。一部の作業員は塚２の盛土の¼カット及び塚３の西トレンチを発掘。

7月18日　月　晴のちくもり　前日まで梅雨末期の大雨で現地は冠水した。塚２のところでは¼カットで残した断面が、無残に崩壊している。ここでは水のひくまで暫く放置する他、手の施しようがなかった。塚１のところでは、作業を継続するため調査地域の排水することにした。

7月19日　火　くもり　塚１の西側では遺構のプランとみられるラインが直線状にあらわれたため、その行方を追って表土を取除いた。しかし、それだけでは遺構のプランの全体像が摑みきれないので、取急ぎ遺構の落込みとみられるラインに対して、直角方向に幅１ｍばかりのサブトレンチを入れることにした。どうも河川氾濫原での調査は、土層が入組み遺構の検出が難かしい。

7月20日　水　くもり　前日のサブトレンチも遺構検出に大した効果がなく、遺構の性格を把握するに至らなかった。一方擬似遺構のラインは延長11m余に達したが、土層は深くなる一方でいつ果てるともなかった。そこで、塚２の南北トレンチの１ｍ西の地点を深掘りすることにより、層位を確かめることにした。この作業は21日まで続いたが、ここで意外な事実が判明した。平面観察で遺構の掘込みとみられたラインは、土層断面観察では外側に落ちていた。外側の無遺物の砂質土が内側の暗褐色の遺物包含層に乗っており、ここでは砂質土の方が新らしい堆積ということが判った。そこで調査の方針を180°転換する必要に迫られ、遺構検出というよりも包含層を平面的に掘下げることに変更した。幸いにも深掘りの断面では遺物包含層が二枚あることが判明したのは、正に怪我の功名であろう。

7月25日　月　くもり時々晴　塚1の周辺を西へ拡大したが、試行錯誤の末、南トレンチと平行して西側1mのところを深掘りすることにした。そこでの土層断面観察の結果、遺物包含層が実は上・下二層に分れていることが判明した。調査の見通しをつけるため、さらに深掘りにより試掘地点の西に幅1mの下位遺物包含層を露出することにした。

7月26日　火　晴　前日に引続き上層の遺物包含層の発掘を続ける。これまでと違い、久しぶりに移植ごてを用いた文化財の発掘調査らしい風景である。午前中は大した変化もなく、単調な作業が続く。午后も移植ごての一掘りひと掘り丹念な作業の連続である。時計が3時を示す頃、一人の作業員が「先生（私のことをそう呼んでいる）、一升瓶の底が出ましたバイ」、さりとて別段驚いた様子はなかったが、現場を覗くと丁度その時青銅鏡の上縁が顔を出していた。作業員が下手に価値判断しない方が現場の平静を保つ上にも良かった。これまで塚1の盛土中からガラス瓶の破片が多数出土したことが、青色した鏡を一升瓶の底部と判断せしめたのである。鏡は完形の和鏡で、鏡面を下にして僅かに傾きをみせては埋没していた。

塚2についても、周辺の水がひいたので作業再開、土層断面は新たに削りなおす。

7月27日　水　晴　梅雨あけ（7月23日）後の太陽は灼く様に照りつける。本日より文化課嘱託河北毅君が来援。調査現場が分散しているところから、これで一個所に調査集中することが可能になった。即ち、河北君は塚1周辺を、緒方は塚2の盛土と手分けして作業を進めることにした。7月29日には塚2で西トレンチ断面に、五輪塔（地輪）が礫層中に混入していることが知れる。また南トレンチでは、盛土の地表下70cmのところにもビニールが捨てられていることも知れた。

8月2日　火　晴時々くもり　今次調査により発見された遺跡、その名称を字名に大字名を冠して「下井手・前田遺跡」と呼ぶことにした。塚1周辺、即ち、この一帯は本遺跡の主体を形造るものとみられるが、上層の遺物包含層の発掘が進む。その発掘過程において、鏡の周辺から鉄器と小形の滑石製連坏が発見された。鏡や鉄器及び滑石製連坏が出土するあたり、具さに観察すると、周辺の遺物包含層よりくろずんでいることが判り、後日そこから土坑が検出された。

塚2の盛土は断面だけ残して盛土の部分を掘下げる。また先日断面上に検出された五輪（地輪）には、「道智」と刻銘のあることが知れる。

8月4日　木　快晴　連日の猛暑で、作業員の中に体に支障を来すものが出てくる。塚1西側の調査地点では、遺物の実測の後遺構の検出に努める。時には撤水して発掘を続行するが、土が硬化して思うに任せない。塚2の地点では、盛土中から五輪塔の残欠数個が発見された。塚2盛土上にあったものまで含めて、地輪3、水輪1、火輪4、空風輪とみられるもの2があった。また別に宝塔の塔身の部分が1基あり、ここには少なくとも5基以上の石塔があったことになる。この様に多数石塔片が存在することは、現在塚2には陶磁片や瓦など塵芥が積重なり塚状に盛上っているが、以前は五輪塔が立並んでいたことが考えられるに至った。明日以降

地下遺構の検出に重点を移すことになる。なお先日発見された青銅鏡について、東京国立博物館の松浦宥一郎氏を介し拓本をもとに検討してもらった結果、同博物館有史室の関秀夫氏や東京藝術大学資料館の五味美里さんに調べてもらった結果、鎌倉時代の**蓬莱鏡**であることが判明した。

8月8日　月　晴　塚3のいわゆる「早馬さん」の盛土の発掘にかかる。他の塚と同様$\frac{1}{4}$カットの方式で処置する。この盛土中には表面観察ですでに、多量の石礫が混入していることが判っていたが、カットが進むにつれ、断面でも大小の礫の混入の状態が明らかになった。

塚1周辺で検出された土坑は、平面形が楕円形（先日、中から蓬莱鏡や滑石製品が出土）であることが判明し、遂次内部の発掘を進めていた。ところが本日は、完形の小皿が三枚重なった状態で出土した。

8月10日　水　晴　河北君は楕円形土坑に十字の断面を残して発掘を進めた。調査も終りに近づき上位の遺物包含層の遺物の実測、その取上げも終る。そこで下位の遺物包含層の発掘実測にかかる。下位の包含層であまり西にひろがらないことが明らかになり、調査も大詰めに近づいた。一方、塚3では断面観察を終え、残りの盛土を撤去した。盛土を取除いたあとの平面形は、直径190cmばかりの範囲に亘り礫が敷きつめられていた。盛土の表面近くには他の塚と同様、ガラス片や近世陶片が礫に混入しており、また一方盛土のかなり深いところから、土師、須恵器の破片のほか、青磁片が出土した。

塚2のところでは、墓坑とみられるものが検出され、先日の見通しがほぼ確実になった。

8月12日　金　晴　塚2のところでは土層の撹乱がはげしく遺構の検出に手間どったが、円形、方形の土坑が数基確認された。また方形土坑の北側に礫が帯状に敷かれていることも判明した。13日～16日は盆休みで、現場も休むことにした。17日から調査を再開、五輪塔発掘地点（塚2）での補足調査、測量、さらに塚1周辺についても補足調査を行う。西への拡大区の北側土層断面の北寄りの土層の状態が異状なことから、それに結末をつける意味で、急拠延長線上に補助トレンチを設定し発掘した。一方、西側拡大区の調査地点では現場保善の意味も含めて埋戻しを行った。2か月に亘る発掘であるため、発掘した土量も相当量にのぼり、埋戻しに数日間を必要とした。それらの作業も一応の目鼻がついたところで、県事務所耕地二課、及び地元農協、荒尾市役所等に調査の協力についての謝辞と調査の終了を告げた。そして**8月19日**午后、最終的に現場を撤収した。

三　調　　査

調査に入る前に、公害防止事業の主管課である県農政部耕地二課より事業内容について聞いた。そこで工事実施の方法として、地区により次の二つの工法がとられることが判った。

(1)　上土のカドミューム汚染土と底土の非汚染土を入替える地区

(2)　カドミューム汚染田の上に、他の地区からの非汚染土を客土する地区

ついでこれらの工法の違いを事業計画図に色分けしてもらうことにした。そこで客土により処理する地区については、遺跡そのものの消滅の虞れのないことから、原則的に発掘調査の必要がない。踏査の結果、遺跡のひろがりが予想される地区（第２図東南部）については、事前に試掘を行い調査範囲をしぼることにした。

1　試　掘　（第２図）

踏査の結果、第２図東南部の100×100m 位範囲を試掘することになった。当初、水田の試掘にバックフォーを使用し、数本のトレンチを入れることが考えられたが、当該事業の目的からして、処理法を間違えば公害の拡散につながりかねないことになる。したがって、今回はバックフォーを使用せず、専ら手掘りによることにした。

試掘の方法として、まず10m 四方のグリッドを設定することにした。まず国道29号線を東西の基線とし、北より約10m のところに平行線を求めＡ列とした。順次10m 毎に平行線を求め、北へＢ列、Ｃ列、Ｄ列……とした。ついで南北の基線はＡ列の西の民家の境界域から５ｍの地点を基軸にして、直角方向にラインを求め１列とした。１列の東に２列、３列、４列として10m 枡のグリッドを現地に設けた。Ｃ列～Ｇ列では調査域が西へふくらみをもっているため、西へ01、02を追加した。

試掘は各グリッドの接点の東、北のそれぞれ１ｍの枡掘りすることにより、遺跡の性格及び遺跡のひろがりを判断した。

発掘にあたり、調査を効果的に進め調査の見通しを得るため、東西列は一列おきに発掘し、試掘結果をみて処理することにした。最終的にＡ列がＡ－１～Ａ－９まで、Ｃ列がＣ－02～Ｃ－８まで、Ｅ列がＥ－02～Ｅ－10まで、Ｇ列がＧ－02～Ｇ－10、Ｉ列はＩ－１～Ｉ－11までの合計54か所を発掘し、Ｂ、Ｄ、Ｆ、Ｈの各列は発掘しなかった。

各試掘地点の状況は、すでに大要は「調査の経過」の中に述べた通りである。土層の状況は第１層耕土で、暗青灰色～暗黒色を呈し、層厚は場所により深浅まちまちで12～22cmであるが概ね18cm前後のところが多い。第Ⅱ層は黄褐色土で褐色のたて縞の虎斑がみられる。Ⅱ層の層厚は２～３cmから５～６cmのところが多く、地点によっては欠如するところもあった。この第Ⅱ層

ではⅠ－７の東断面で小ピットが発見されたほか、Ⅰ－11では近世陶片及び須恵器の小片が発見された。第Ⅲ層は明黄褐色～暗褐色土で花崗岩の霜乱土とみられる。この層では遺物の痕跡すら発見出来なかった。

以上、54か所の試掘を実施したが、その土層断面観察の結果から周辺に遺構の検出される可能性は薄いと推測した。またＢ列、Ｄ列、Ｆ列及びＨ列を試掘しても新たに遺構の検出される期待も少ないものと考えた。その様なことから、この地区についての調査はこれ以上必要ないものとの判断をした。

なお、塚１、塚２、塚３（所謂早馬さん）の試掘等については、以下それぞれの項目中で述べたい。

２、塚１とその周辺（第３図）

塚１は下井手・前田393番地にあることは既に述べた。塚は水田の畦上にあって、北側の水田一枚距てたところには関川の堤防がある。関川は塚より北へ40m足らずのところを西へ流れている。計測の結果北側水田面の標高は8.16m、塚上の標高8.88m、塚の平面形は東西5.7m、南北3.4mの楕円形をしている。

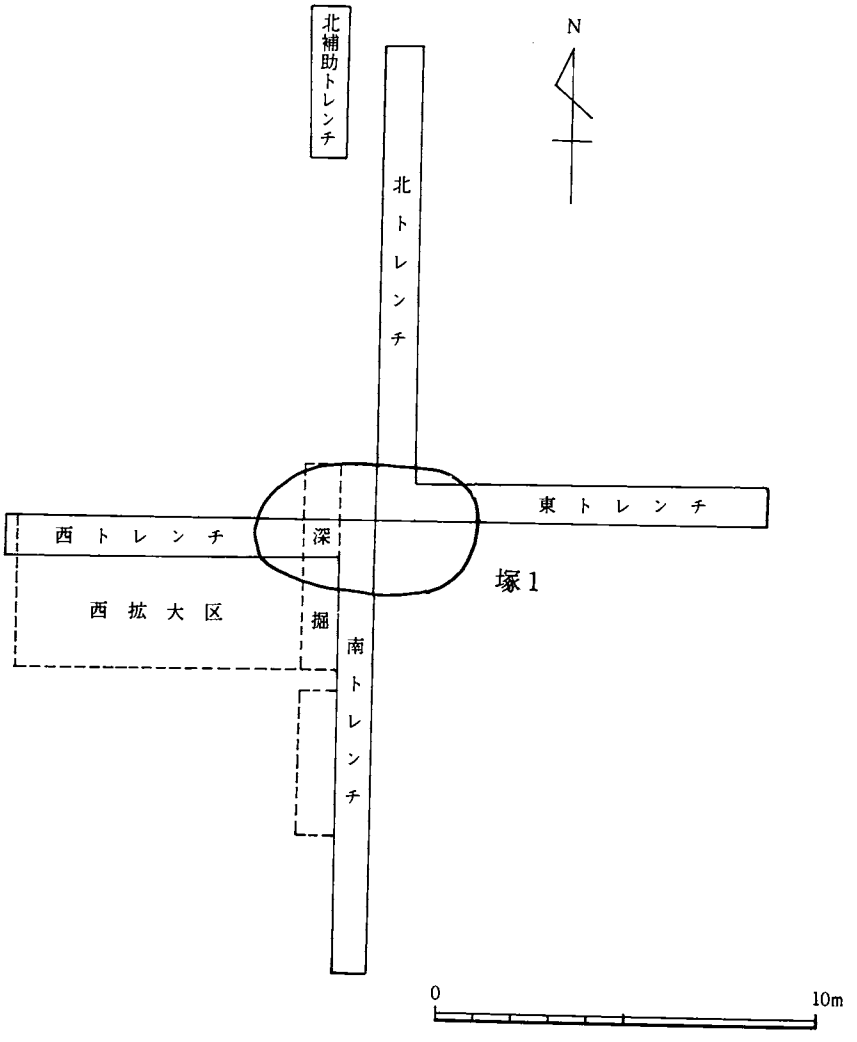
(1) 塚１周辺の土層層序（第４図）

塚１とその周辺の試掘は、東西南北のそれぞれの方面にトレンチを設定した。トレンチは塚周辺に溝などの埋没遺構の検出を目的としたもので、各方向に約10m（塚の中心より東へ10.1m、西へ9.7m、南へ11.9m、北へ12.4m）の長さの試掘をした。試掘の結果、塚の周辺に設定した各トレンチから特定の遺構は検出されなかった。

塚１の盛土の部分は、まづ盛土を$\frac{1}{4}$カットすることにした。調査はまづ東北側と西南側の各$\frac{1}{4}$を発掘した。ついで、土層断面の確認の後盛土部分を取除き、地下の埋没遺構の確認という手順で発掘作業を行った。

塚１とその周辺の試掘の状態は第３図と第４図に図示したとおりである。第Ⅰ層耕土で場所により色調層厚に多少の違いがあるが、灰褐色～黒褐色を呈し、層厚14～25cmである。第Ⅱ層は黄～黄褐色の花崗岩の霜乱土とみられ砂質の土壌である。盛土の部分は中央部で48cmが計測され、周辺になるにしたがい幾分薄くなる。また塚の盛土は、周辺水田への移行部分は漸移的で明瞭に区分することは困難であった。

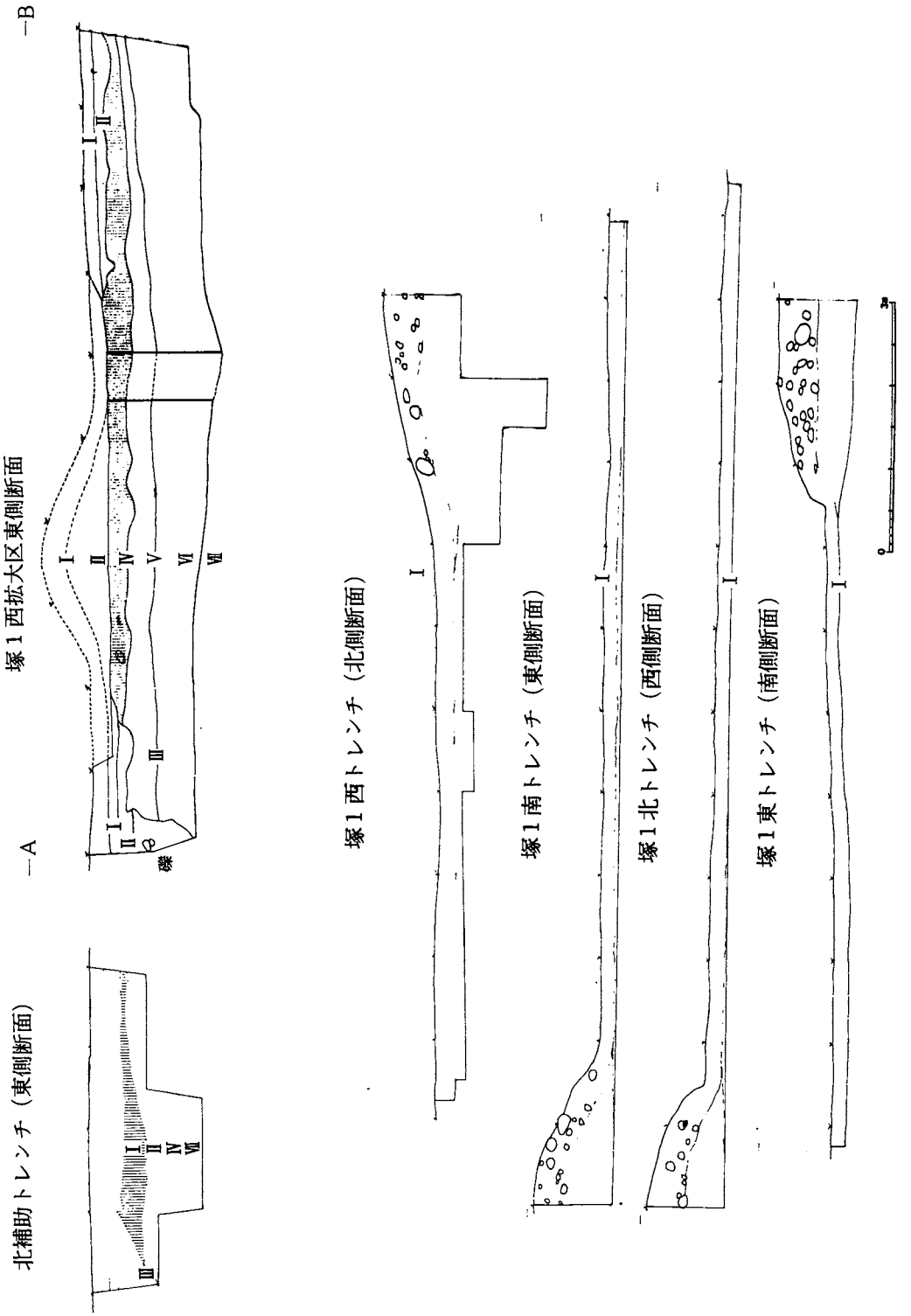
塚の盛土には、大小不揃いの礫が多量に混入していた。須恵器、土師器の他、陶磁片、擂鉢、甕、こね鉢、煉瓦、瓦、さらにガラス瓶等の破片が層中に混在していた。これらの物は一挙に積上げられたのではなく、遂次時間をかけて廃棄されたという印象を受けた。周辺の畑から耕作中に発見された砂礫等が、その都度捨てられたものとみられる。



第3図　下井手・前田遺跡塚1周辺トレンチ配置図

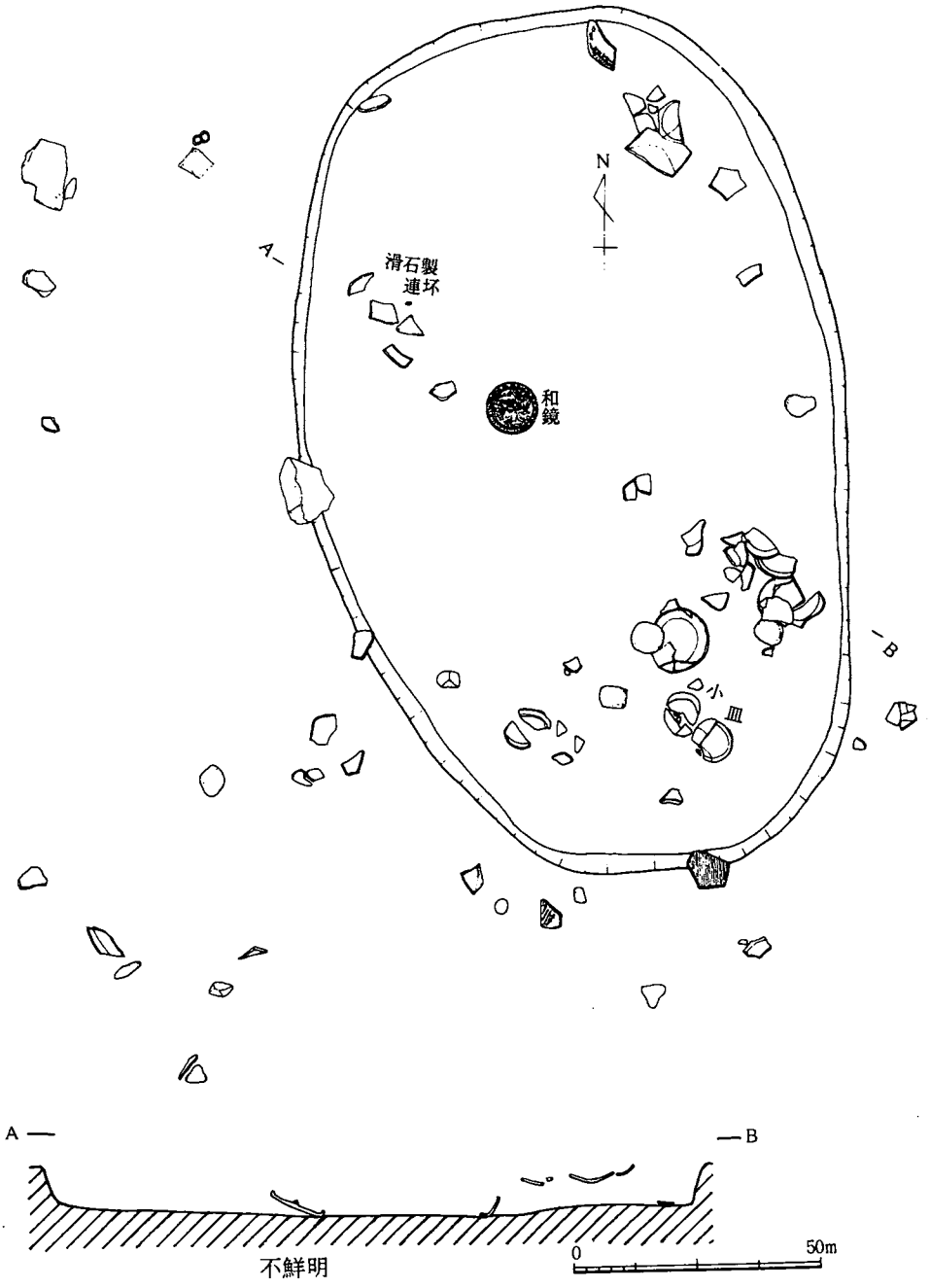
当初、塚の発掘にあたり、周辺水田の耕作土下面まで掘下げ、地下埋没遺構の検出に努めたが、特別な構造物は発見されなかった。

究極的に地元で単に「塚」と呼んでいる塚1は果して何だったのか、という疑問に答えねばならないが、塚1の発掘の結果からそれ自体特別な遺構とは考えにくい状態であった。しかし、さきに「調査の経過」の中にもふれたが、調査に終始ご協力下さった地元の荒尾市文化財保護委員長の福島作蔵氏は、地元では「小岱山からこの塚に矢を射た、そのことから〝矢差し〟と呼ぶ」ということを教示して下さった。また塚の北側の水田(394番地)に〝天神森〟の小名のあることを教えて下さったのは作業員の一人で、その東は沼地となっている。ここでは参考まで紹介するのに止める。

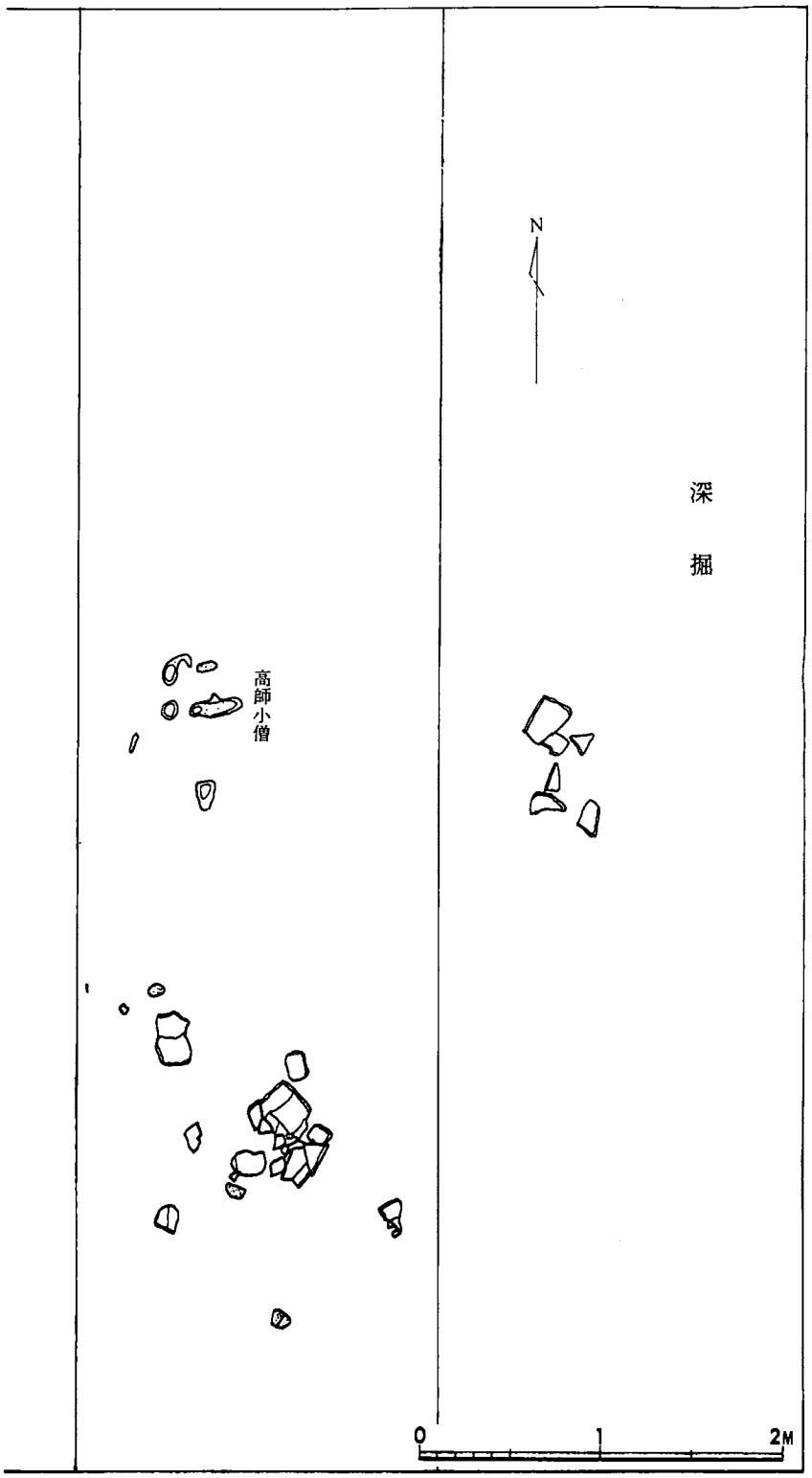


第４図　塚１周辺各トレンチ土層断面

第5図　塚1西側拡大区上層遺物出土状況



第6図　土坑と遺物出土状態



第7図　塚1西側拡大区下位遺物出土状況

塚１西側拡大区（第３・４・５図）

西トレンチ耕土下に多量の遺物が検出された。塚１周辺は公害防除の方途として、現水田面の上に客土することにより対応する地区である。ここに改めて水田下を発掘する必要はないとも考えられるが、西トレンチ上に遺物を放置して済ますことは許さるべくもない。そこで一部地区を限定して発掘を試みた。それが西拡大区で、西トレンチの北壁より南へ４ｍ、南トレンチの西壁より9.5ｍの38平方ｍに限って調査をした。このうち東側、幅１ｍの範囲（後に層序の変化の具合を確めるため、北、さらに南へ延長）に深掘区を設け層序を確認した。

まず、この塚１周辺の土層層序について西拡大区の東側及び、北補助トレンチにより説明したい。西拡大区の東側の土層断面は、第４図上段に図示したとおりで、第５図のＡ－Ｂ断面及び北補助トレンチの東側土層の断面を図をもとに説明すれば

第１層は　耕土で層厚14～25cm、粘質で灰褐色～黒褐色の色調を呈する。

第Ⅱ層は第Ⅰ層との界面は比較的平らか（鋤耕による）であるが、下位との界面にはかなりの起伏がある。層厚も10～20cmで、土色は黄～黄褐色を呈した砂質土である。

第Ⅲ層は部分的にしか存在しない。西拡大区の北側と、北補助トレンチの北側で、第Ⅳ層の遺物包含層を切る形で発見された。第Ⅲ層は灰褐色の砂粒子からなり、中に赤褐色の砂粒が混入し粘性に富んでいる。しかし、層中に文化的遺物は検出されなかった。発掘調査の過程では、自然堆積層（第Ⅲ層）を切る形で文化層があるのが遺跡の一般的様相であることからして、第Ⅳ層の第Ⅲ層により切断された線を遺構の落込みと見誤ってしまった。切込み線を追跡の結果、とても遺構そのものと結びつかないことを確かめた上で、第３図にみる様な深掘区の層序確認を急いだ。

第Ⅳ層は上位の遺物包含層である。この層には須恵器・土師器の土器片のほか、大小の礫が混入していた。後述の和鏡を出土した土坑も、この層中から発見された。この層はかなりのでこぼこがあるが、概ね20～30cmの層厚である。第Ⅳ層も北補助トレンチの南端では厚さ10cm前後となる。このトレンチを南へ延長すれば、深掘区の断面でみられる様な上位に第Ⅲ層が乗るものとみられる。第Ⅳ層の土色は斑点まじりの暗褐色～黒褐色で、下になるほど色調が濃色を呈し粘性に富んでいる。

第Ⅴ層は暗灰褐色土で、黒色粒子を混じた縦縞の虎斑のある砂質土である。層厚10～40cmで南になるにつれ薄くなる。また北側は砂礫を含んだ暗青灰色土により垂直にえぐられている。注目すべきことはこの層の下面から土師器が出土したことで、本稿では第Ⅳ層の上位遺物包含層に対して、下位遺物包含層として処理した。

第Ⅵ層以下は無遺物層である。第Ⅵ層（層厚50～70cm）は、灰褐色砂質土でやや粘りがある。第Ⅶ層は青灰色の砂質土で、0.5～1.00mmの粒子の砂粒を主体として部位によって礫の混入がみられる。

以上のように、遺物包含層は第Ⅳ層と第Ⅴ層であるが、下位の遺物包含層（第Ⅴ層）では第Ⅵ層に接する下面に遺物が集っていた。ここで問題になるのはⅢ・Ⅵ・Ⅶ層等の無遺物層の成因である。恐らく、現地の状況から河川の自然堆積と考えられる。そのことは、現地が関川の氾濫原とみられるにふさわしい地形で、川の蛇行の状況からも推測出来よう。

(2) 塚１西側拡大区（第３・４・５図）

上位遺物包含層及び土坑（第５・６図）

疎密の差はあっても、第Ⅳ層20～30cmの全域にわたって遺物が存在した。出土した遺物は須恵器及び土師器で、その殆んどが破片であった。また層中には大小の礫が全面に亘って分布していたが、それ自体が遺構を形成している状況ではなかった。調査が終った時点でも、これらの礫がどういう形で持込まれたか、それとも流入したかの疑問については消し去れなかった。

発見された遺構として円形のピットこのほかに長楕円形の土坑と楕円形の土坑が検出された。長楕円形の土坑は西拡大区の東南寄りのところにあって、長軸を西北西から東南東にとり、145×60cm深さ約15cmの浅めの土坑があった。円形ピットは発掘区の北東より径40cm余のものと、南側の径60cm余のもので、いづれも深さ約10cmの掘込みの浅いものであった。これらの遺構の性格については、発掘区を限定した状況で究明することは無理で、ここに事実だけを示すに止めたい。その他、発掘区西寄りの楕円形の土坑から和鏡等の遺物が出土した。そこで、これらの遺構及び遺物の出土状況について説明したい。

第Ⅳ層発掘の過程で、層中から礫や土器片の出土が相次ぐなかにあって、突如として鏡一面が発見された。（状況は「調査経過」７月26日のところに記述）単調な発掘調査で、遺構検出困難な状況下であったが、シートで覆い撤水などの手段を用い遺構の検出につとめた。検出された土坑は平面プランが176×110cm の楕円形をしていて 、長軸を北北西から南南東に向けていた。土坑は中央部で深さ約10cmであった。鏡は鏡面を下にして、僅かに傾き加減に埋没していた。土坑中も土坑外の遺物包含層と遺物の出土状態に大きな違いはなく、土器片及び石礫も土坑中から出土した。しかし、土坑中出土遺物の中で注目してよいのは、完形品の出土である。鏡の出土したところから南側約70cm離れたところで三枚の小皿（第14図）が一部重 なった状態で出土した。出土遺物の多くが破片であるのに、この数個だけが完形品であることは、埋没、否埋納についての人の意図を感ぜずにはおかない。さらに、特殊な遺物として小形の滑石製連坏[注1]（第15図）が出土した。場所は鏡の出土地点より北側から30cmばかり離れた地点の鏡とほぼ同レベルで、一部が欠けているがほぼ完形とみて差支えない。土器以外の遺物として鉄器片があるが、それは土坑外であった。

下位遺物包含層（第７図）

第Ⅴ層下面に土師器が発見されたことは前に触れたとおりである。現地表（水田面）から約

75cmのところに、遺物が面的に分布していた。遺物は深堀区から西拡大区にかけて発見されたが、上位遺物包含層の調査終了後、下位での遺物の検出を試みたがここでは殆んど発見されなかった。現場の状況から包含層はむしろ北側にむかってひろがるものと考えられる。

下位遺物包含層での遺物は須恵器を含まず、出土した土器のすべてが土師器で、しかも比較的大形破片が多かった。また同一層序には径10～20cm位の礫と高師小僧があった。高師小僧はよく発達した大形のもので、何かをコアにして生長したものと考えられ、当初、それが鉄器と見まごう程の銹着ぶりであった。

(3) 塚１と西側拡大区出土の遺物

塚１盛土中の遺物（第17図）

塚１の盛土中から弥生以降各時期にわたる遺物が出土した。弥生式土器片とみられるものはいづれも小破片で、実側に耐えるものは少なかった。ついで須恵器・土師器については、その一部を図示（第17図）したが、大部分（小箱一ぱい位）は小破片で胴部等の実測困難なものであった。ついで擂鉢、捏ね鉢等の土製器及び陶磁片があった。擂鉢の中には平底で江戸期まで時代がのぼるのではないかとみられるものと、高台を付したものがあった。陶磁器片の中には舶載の白磁もあったが、染付の波佐見・有田の日用雑器が多量に出土した。また遺物には相違ないが、近世瓦の破片やガラス瓶類の出土も相当量に上った。以下、第17図について説明を加えれば

須恵器　87は甕の口縁部で、復元口径21cmに及ぶ。88は甕の底とみられ破片であるが、つくりは比較的雑である。

土師器　89～92はいずれも土師質の小皿である。底部は糸切り手法が用いられ、ここでは復元口径５～６cm程度のものと、10cm位のものであった。

その他　93は舶載の白磁片とみられるもので、口径12.4cmと復元される。

西側拡大区出土遺物（第８～16・18図）

塚１撤去後、調査が進むにつれ確かな遺物包含層があることが判明した。即ち上位（上層）包含層と下位（下層）包含層の遺物である。上位包含層から土坑が検出され、中から和鏡等の重要遺物が出土した。以下それらの出土遺物について、上層（第８～14図）、土坑中（第14～16図）及び下層（第18図）に分けて説明したい。

上層出土の遺物　(第８～14図)

上層出土遺物の中には須恵器と土師質土器及び瓦器等がある。図示した１～48は須恵器で49～74が土師質の土器である。また75は弥生式土器の口縁部とみられ、76・77は瓦器である。

須恵器　須恵器は各種の器形があり、２・３・15～18は甕形土器とみられる。出土した遺物の中には、図示困難な胴部の破片が多量にあった。焼成はいづれも良好で、青灰色の須恵器の一般

的色調のものからチャコールグレイ（15）などのものがある。1・4～7は壺形土器とみられ、4以下にみるような様式的に時代が下がるとみられるものもある。なお、1・4の口縁部には自然釉が付着している。8～14、19～33は盤とみられるもので、これには台付のものと脚台のないものとがある。8は上・下別個の破片であるが、同一地点から出土し、図示復元（口縁径21.6cm）したものである。口縁部が直上し、ゆるく外反するその器形があたかも、九州中部の弥生後期の高杯を思わせるものがある。焼成良好、暗褐色の土器である。10・11は8の口縁の状態に類似しているが小形（口縁径約14cm）のものである。9・12・19は同類の台付盤とみられるが、12の脚台は横に開き気味である。9は全体の$\frac{3}{4}$位、19は$\frac{1}{3}$位のものであるが、ほぼ全体像を把えることが出来る。それぞれ口縁径15.4・17.0cm、底径10.6・13.2cm、高さ3.4・3.0cmを測る。また器面の色調は赤味を帯びたネズミ色又は淡いネズミ色である。28の台付盤はこの二者と異なり、器体の状態が大きく違っている。口縁部への立上がりがなく、すんなり口縁部へ移行している。

その他13・14・20～27・29～33は脚台のない盤形土器とみられるもので、底は平底または平底に近い形である。27を除き、大小、深浅の差はあるが概ね同形の土器とみてよかろう。口縁径は13～18cmを測るが、14～15cmのものが多い。

34～40は埦形の土器で、大部分は破片で完好なものが少ない。36は約$\frac{1}{2}$位の破片で、図示すれば口縁径17.0cm、高さ5.8cmを復元出来る。体部はまるくふくらみをもち、脚は外反する。焼成良好、外面黒褐色、内面ネズミ色をしている。平底乃至丸底のものもあるが、39の底には「×」の窯記号がある。

41～48は蓋で、48以外それぞれ特徴的なつまみがある。46は宝珠形、41は中心部が突出しており、42は中央が凹みリンク状をしている。44は42に近く、その特徴をきわ立たせている。45は上面が平坦化しているが、端は大きく張り出している。43・47にもつまみの欠落が観察される。41はこし高で、口縁の端末が丸味をもっていることで、42・43・48と大きく異っている。47は41の口縁に近く、42・43の口縁端末は爪状になっている。いづれも焼成概ね良好。48は器形の歪みが大きい。

土師器　49～74は土師質の土器で、49～52は甕形土器の口縁部である。器面には刷毛目による調整、内面には削りの手法が観察される。49の器形から胴張りのある甕が推定される。

53～74はいづれも皿形の土器で、底に糸切りの手法を見ることが出来る。器形も一定せず、口縁径14cm前後のものと、7～8cm程度のものがある。個体により、口縁への立上がりの状態に微妙な違いをみせている。

弥生式土器　75は器形のうえから弥生前期末にでも位置づけられる土器片であるが、器面がかなり磨耗している。それは恐らく他から混入したものであろう。

瓦　器　76・77は瓦器の埦形土器である。器色は白又は淡いネズミ色を呈し、焼成は余りよくない。

鉄　器　（第15図）本遺跡でただ一点の鉄器が土坑の横から出土している。84に図示し鉄器がそれで、92×27㎜位の小形の鉄片で、一側が把手状に細くなっている。また反対側は幅が広くなり折損している模様である。その巾広の部分は銹膨していて原形が定かでないが、下方が刃になるものと思われるところから刀子かと考えられる。

土坑中の出土遺物（第14～16図）

塚１西拡大区の上層から数個の土坑が発見された。そのうち西よりの地点から発見された土坑は大形で、中から青銅鏡などの遺物が出土した。以下この土坑中出土の遺物を、単に土坑中の出土遺物として一括したい。土坑中から須恵器、土師器のほかに青銅鏡および小形の滑石製品が発見された。須恵器や土師器の中には完好なものが多いのも特色。

須恵器　（78～80）　78はほぼ完形土器で、口縁径14.8cm、高さ4.1cmで深目の盤である。堅緻な焼成、外面暗褐色、内面橙褐色である。79は78とほぼ同形の盤とみられ、80は蓋で上部に宝珠形のつまみがつく。

土師器　（81～83）　土師質の小皿で、いづれも完形である。またこの三点は同一地点から一括出土した。いづれも灰黄白色、軟弱な焼成で、糸切り底である。口縁部径はそれぞれ8.8・8.4・9.1cmで、高さもそれぞれ1.0・1.2・1.4cmを測る。

小形滑石製品注2　（85）　土坑中からほぼ完形の小形滑石製連坏が一点発見された。二連の桶状の彫込みのある滑石製品で、桶状に中を彫込み、中壁を設け二連になっているのが特徴である。横4.4cm、奥行2.4cm、高さ1.9cmを測り、底には浅い一本の線条が引かれている。

青銅鏡　（86）　青銅鏡一面の出土は、本遺跡を特殊な遺跡として人々の注目をひくことになった。本鏡についての考察は、付論の東京国立博物館関秀夫主任研究官の論考によることにし、ここでは単にその計測値を述べるに止めたい。

蓬莱鏡　総重量173.5g、鏡面径11.20～11.28cm、縁高1.0cm、縁幅0.3cm、紐座径2.17cm、鏡面の反りは0.22cmの凸面鏡。

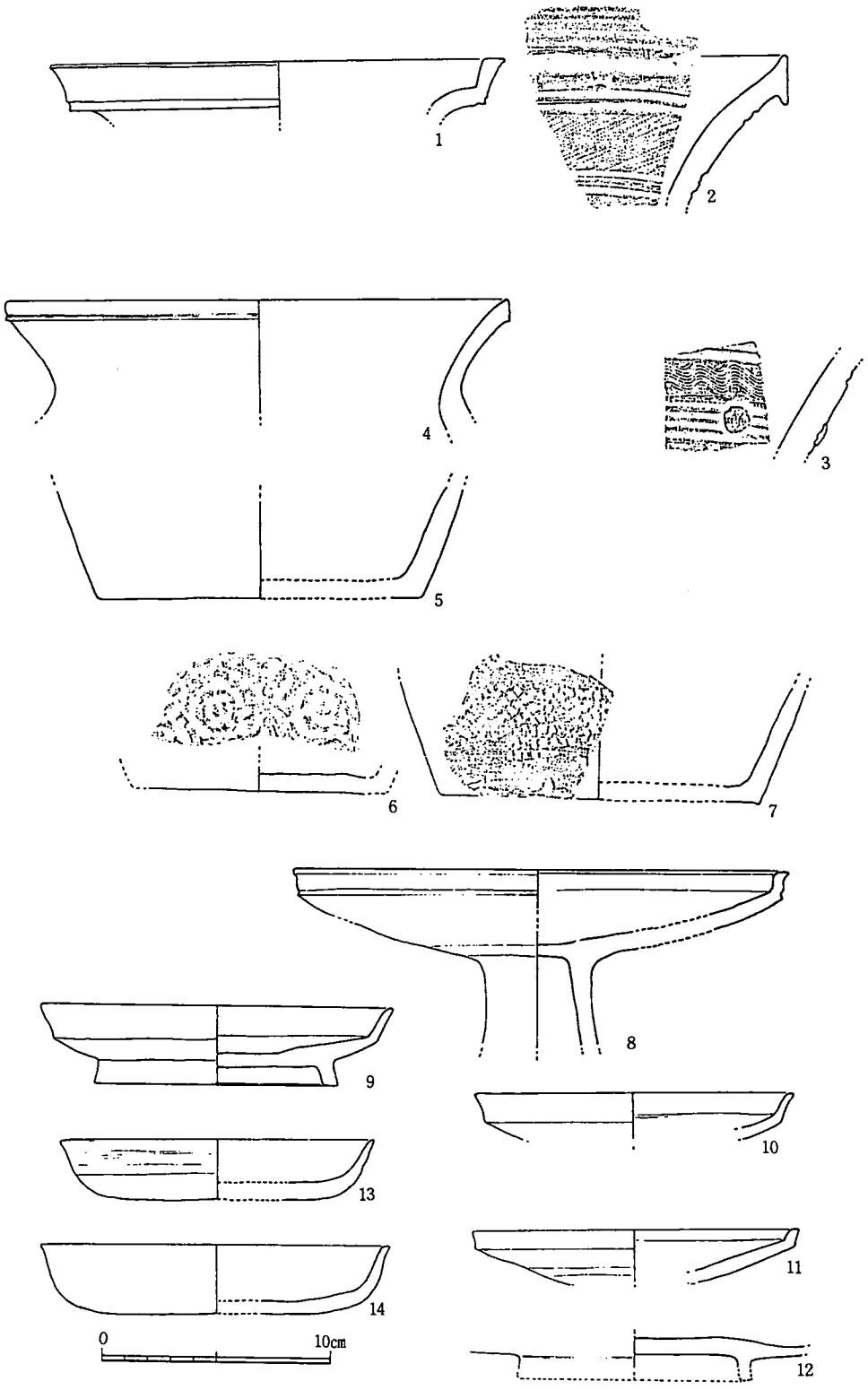
下層出土遺物（第18図）

塚１西拡大区の下位の遺物包含層から土器片が出土した。その中には須恵器を含まず、すべてが土師器であるのも特徴であった。

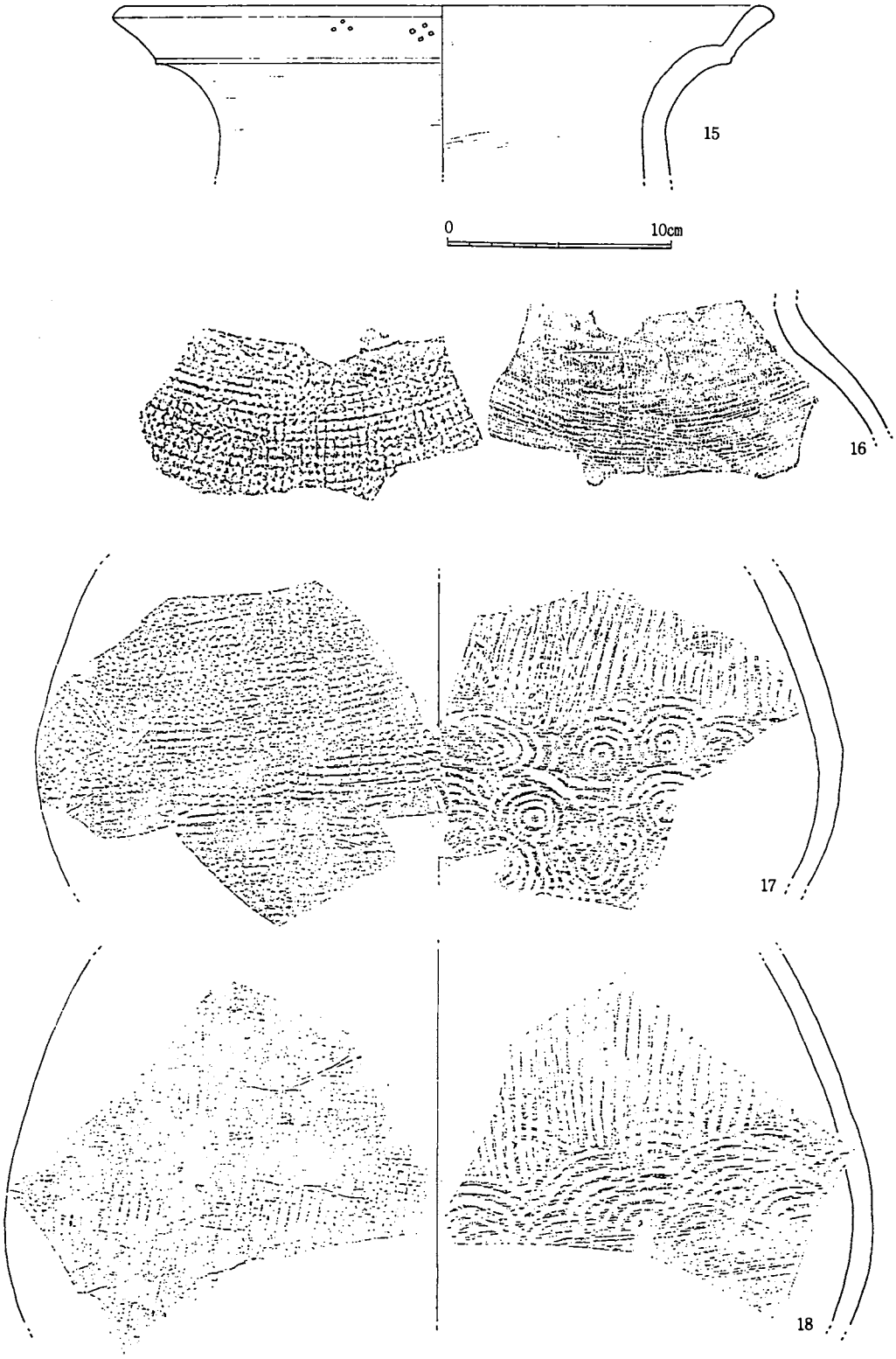
土師器　94～97・101・102は皿又は浅鉢で、それぞれ多少の器形に変化がみられる。94は暗褐色平底で全体に歪みが大きい。復元口径11.4cm。95～97は94と同形またはそれに近い破片である。101は丸い不安定な底をした薄手の土器で、全体の¼位の破片である。復元口径13.8cm、器に赤く塗彩したあとが認められる。102は平底の完形土器で、口縁下が膨らむのも特徴としてあげられる。口縁径13.2cm。

甕形土器として三点を取上げた。98～100がそれで、いづれも破片からの図示復元である。98は胴張り豊かで口縁径を胴径が上まわっている。胴部外面の器面調整は、箆様のものであらく仕上げており、内面には胎土の削り手法が観察される。口縁径19.6cm、胴径24.9cm、高さ推定28.4cmの橙褐から黒褐色の器面の土器である。99は98と大きく形態を異にしている。その最大の特徴は口縁径が胴径を上まわることで、口縁部の反りの具合も異なっている。外面に刷毛目の痕、内面に削り手法が見られる。底部の状態が定かでないが、甑の可能性がある橙褐色の土器である。100は98に似た小形の甕であるが、外面は赤褐色に灼けており刷毛目調整文を残している。内面は削り手法がみられるが、器面の起伏がはげしい。

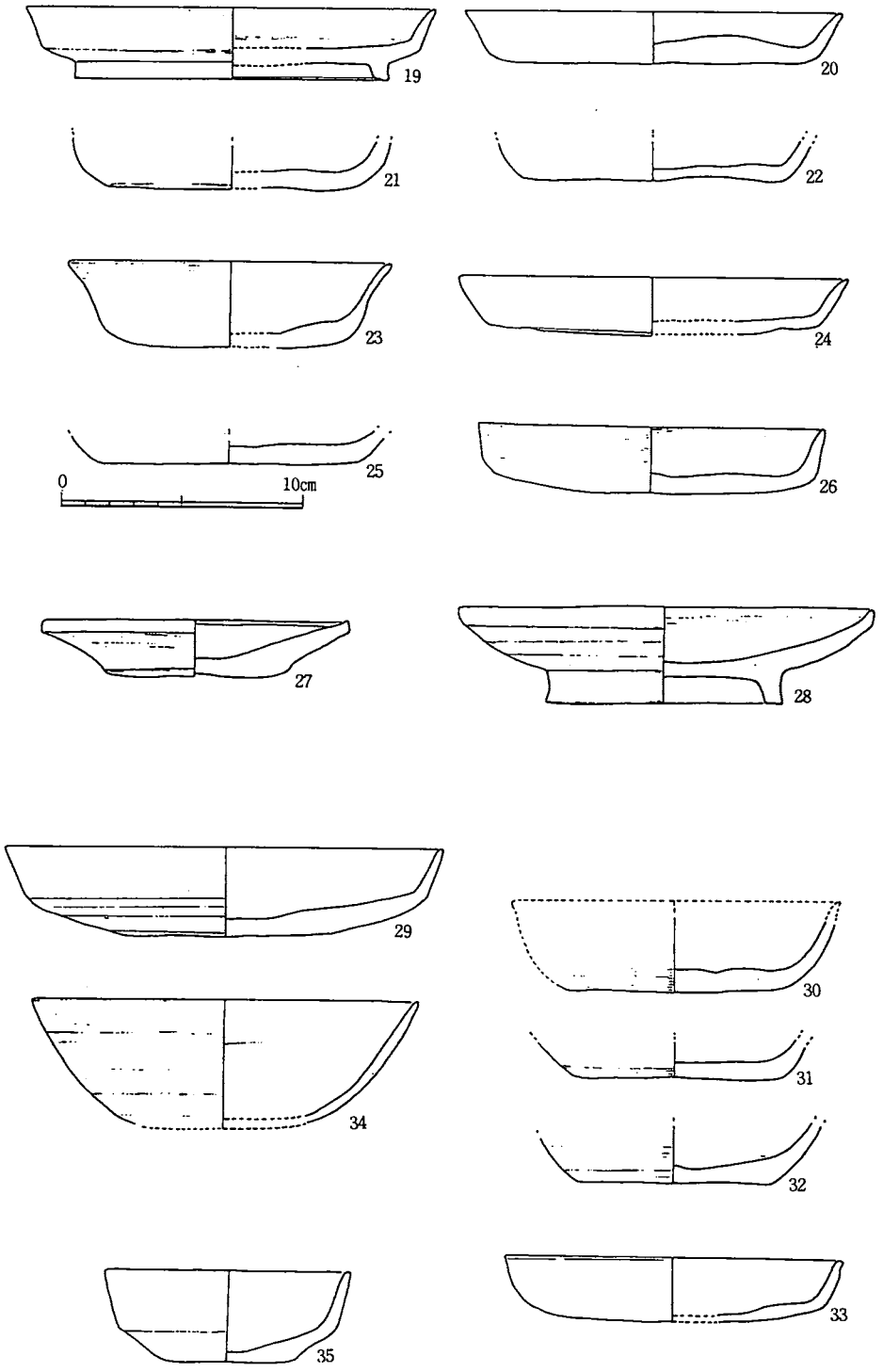
注１・２　同類の小形滑石製品は、福岡県でも出土例が報告されている。「御笠川南条坊遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第８集　54頁上載　1978　福岡県教育委員会発行



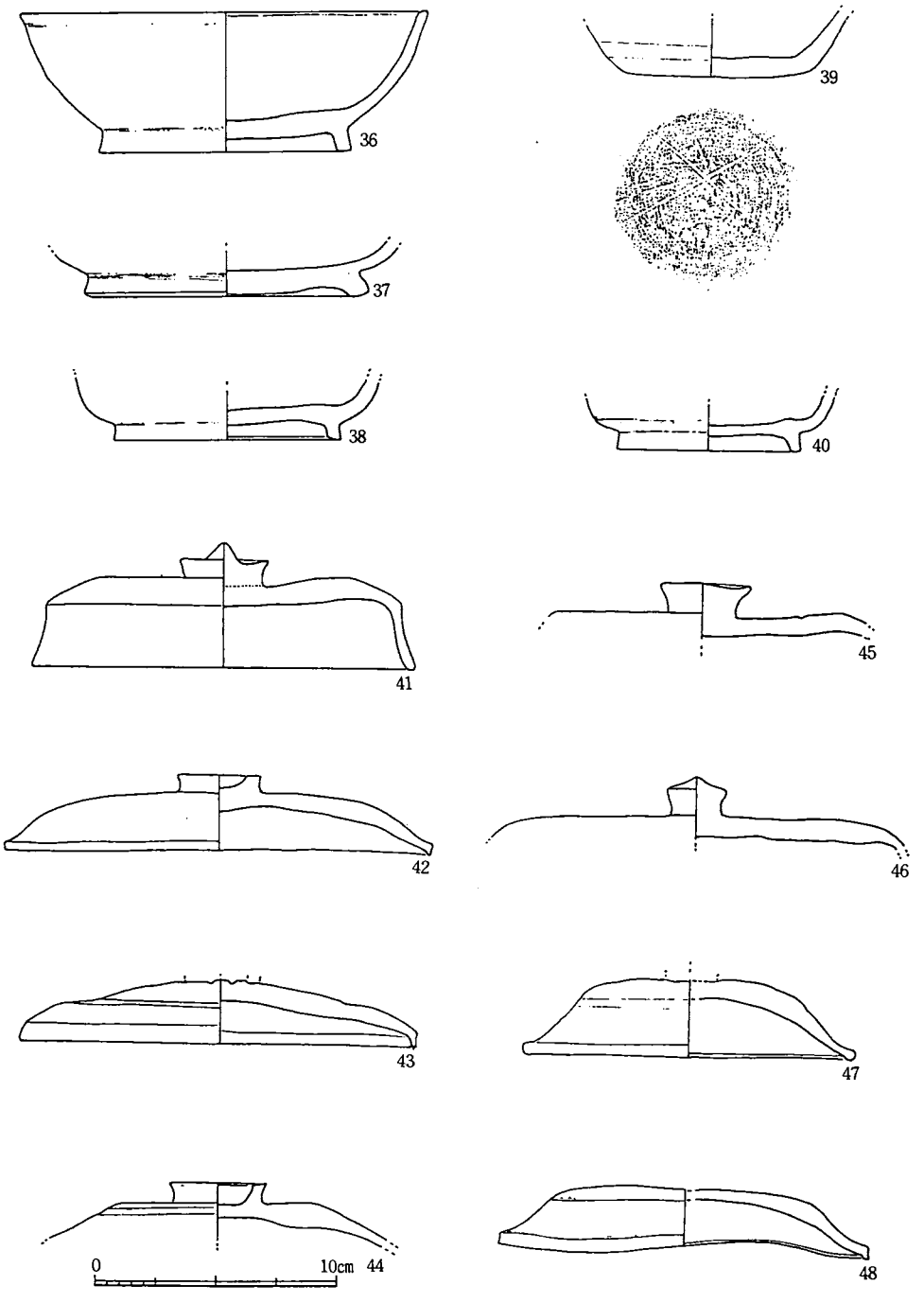
第８図　下井手・前田遺跡出土遺物１（塚１周辺上層）



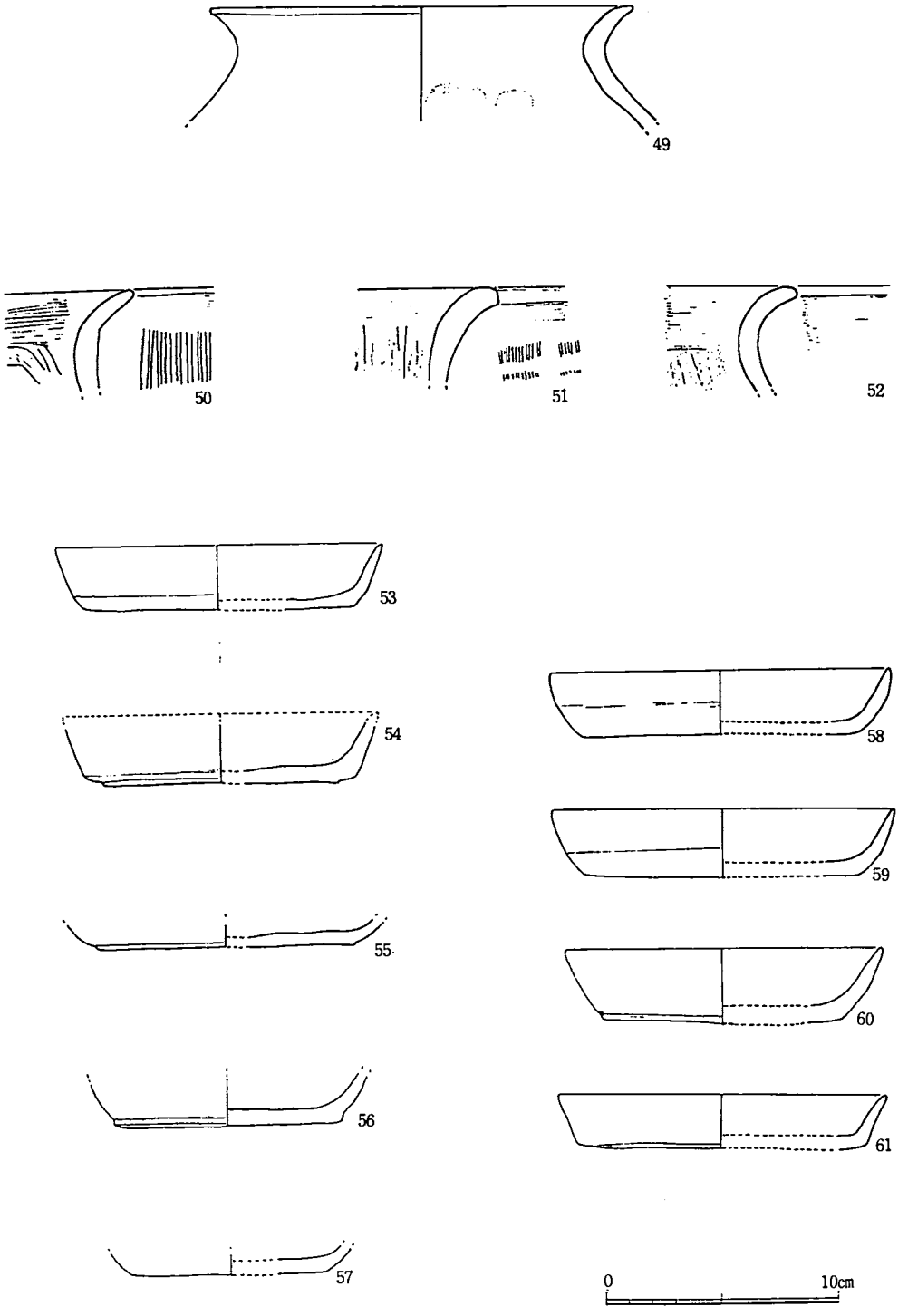
第９図　下井手・前田遺跡出土遺物２（塚１周辺上層）



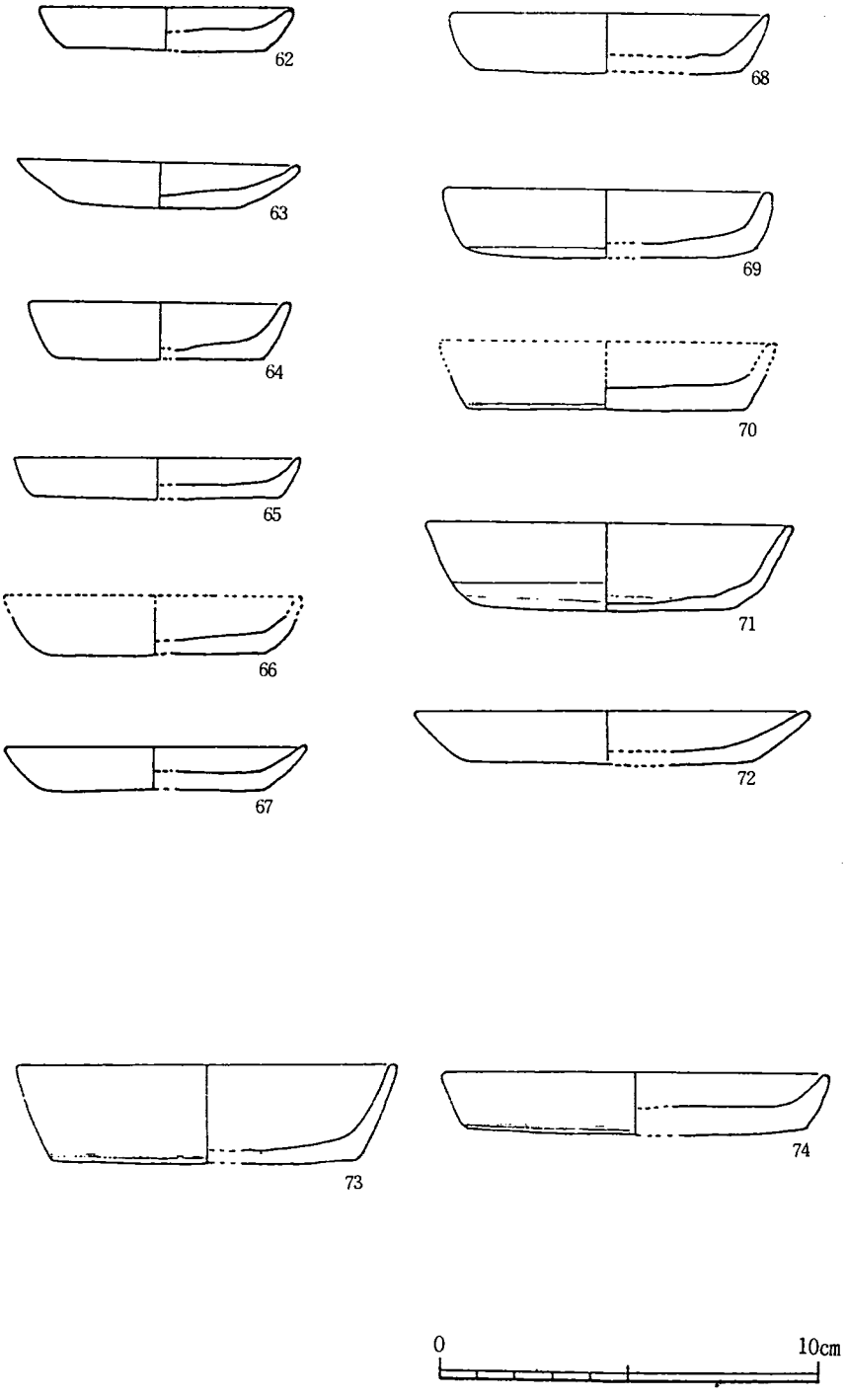
第10図　下井手・前田遺跡出土遺物３（塚１周辺上層）



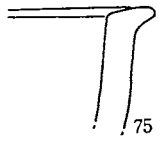
第11図　下井手・前田遺跡出土遺物４（塚１周辺上層）

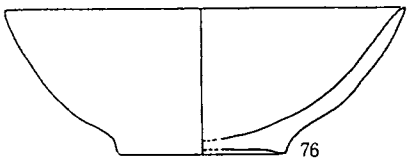


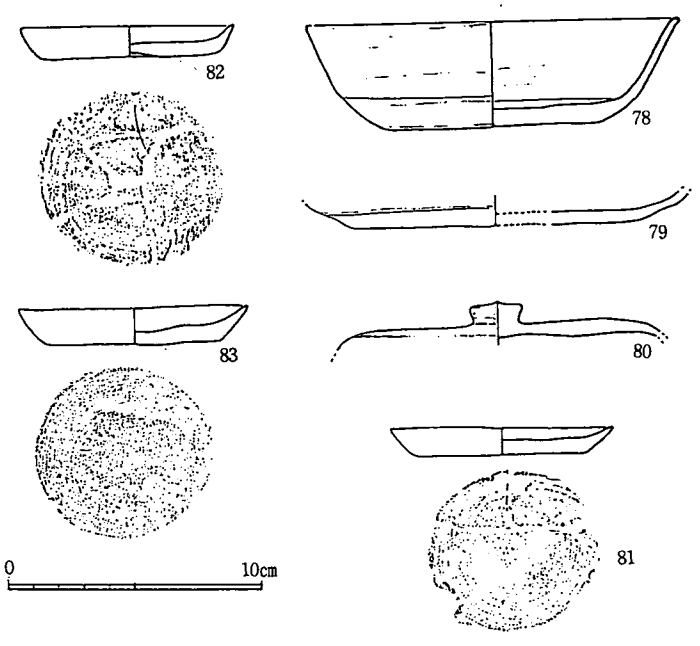
第12図　下井手・前田遺跡出土遺物５（塚１周辺上層）



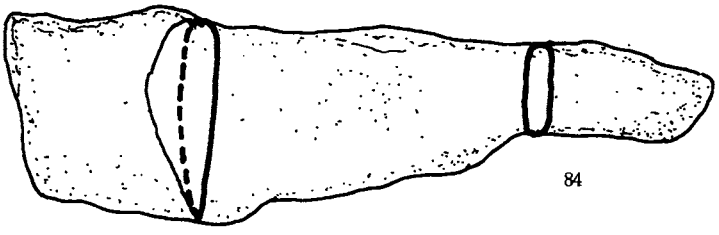
第13図　下井手・前田遺跡出土遺物６（塚１周辺上層）



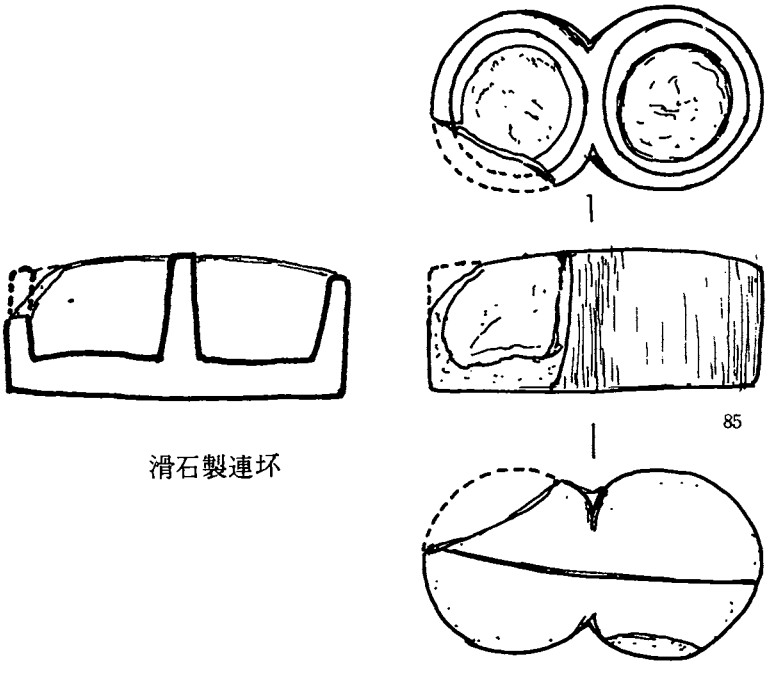




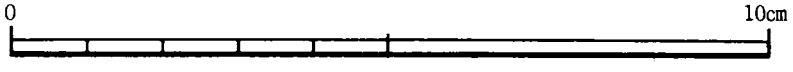
第14図　下井手・前田遺跡出土遺物７（塚１周辺　上下　上層土坑中）



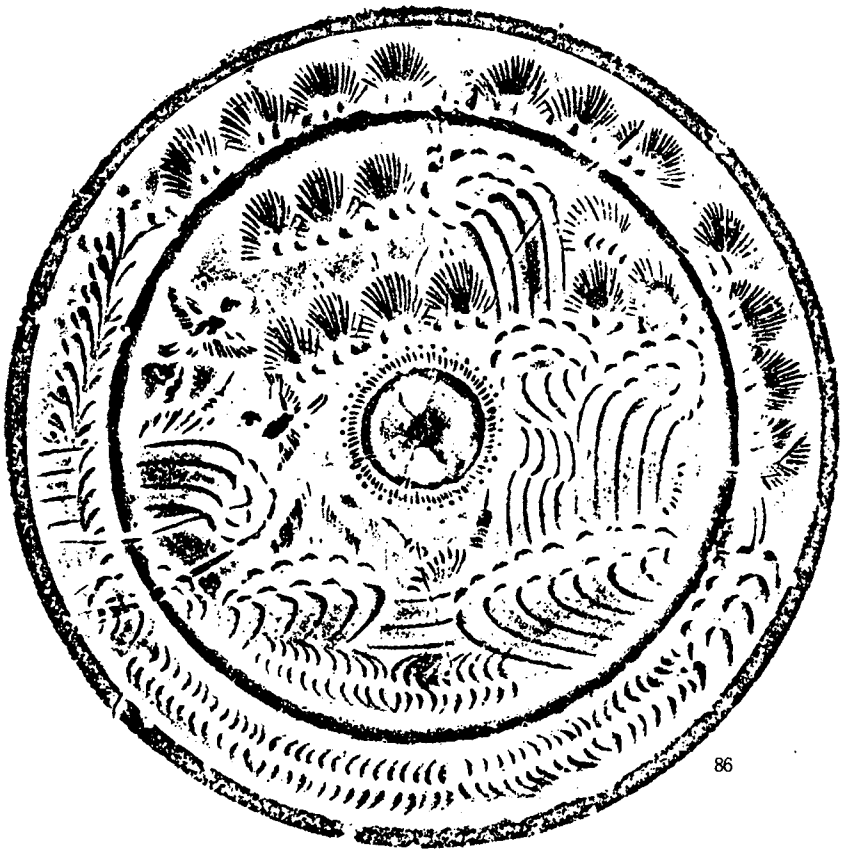
鉄　器



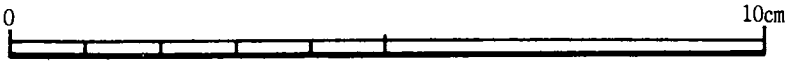
滑石製連坏



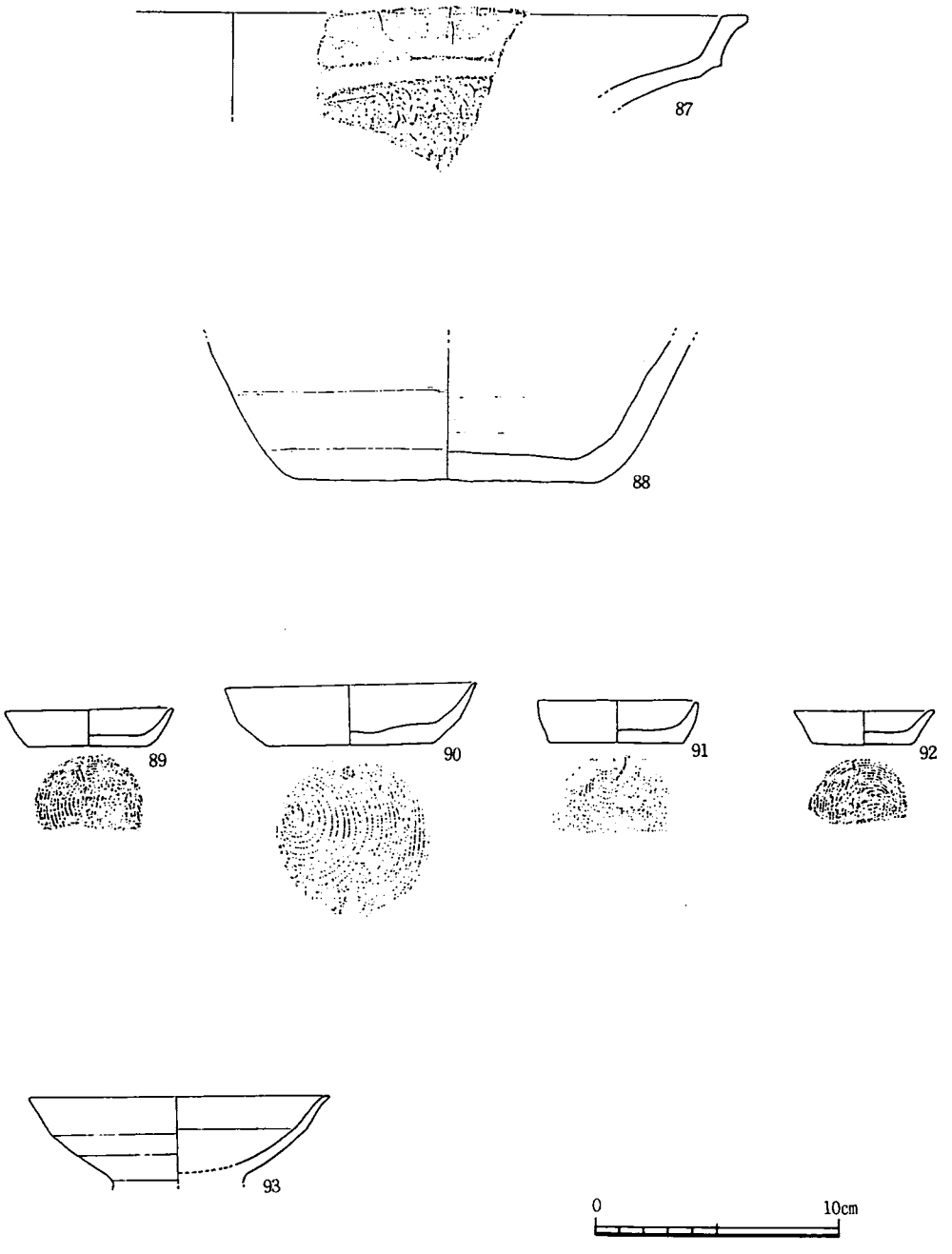
第15図　下井手・前田遺跡出土遺物８（土坑中）



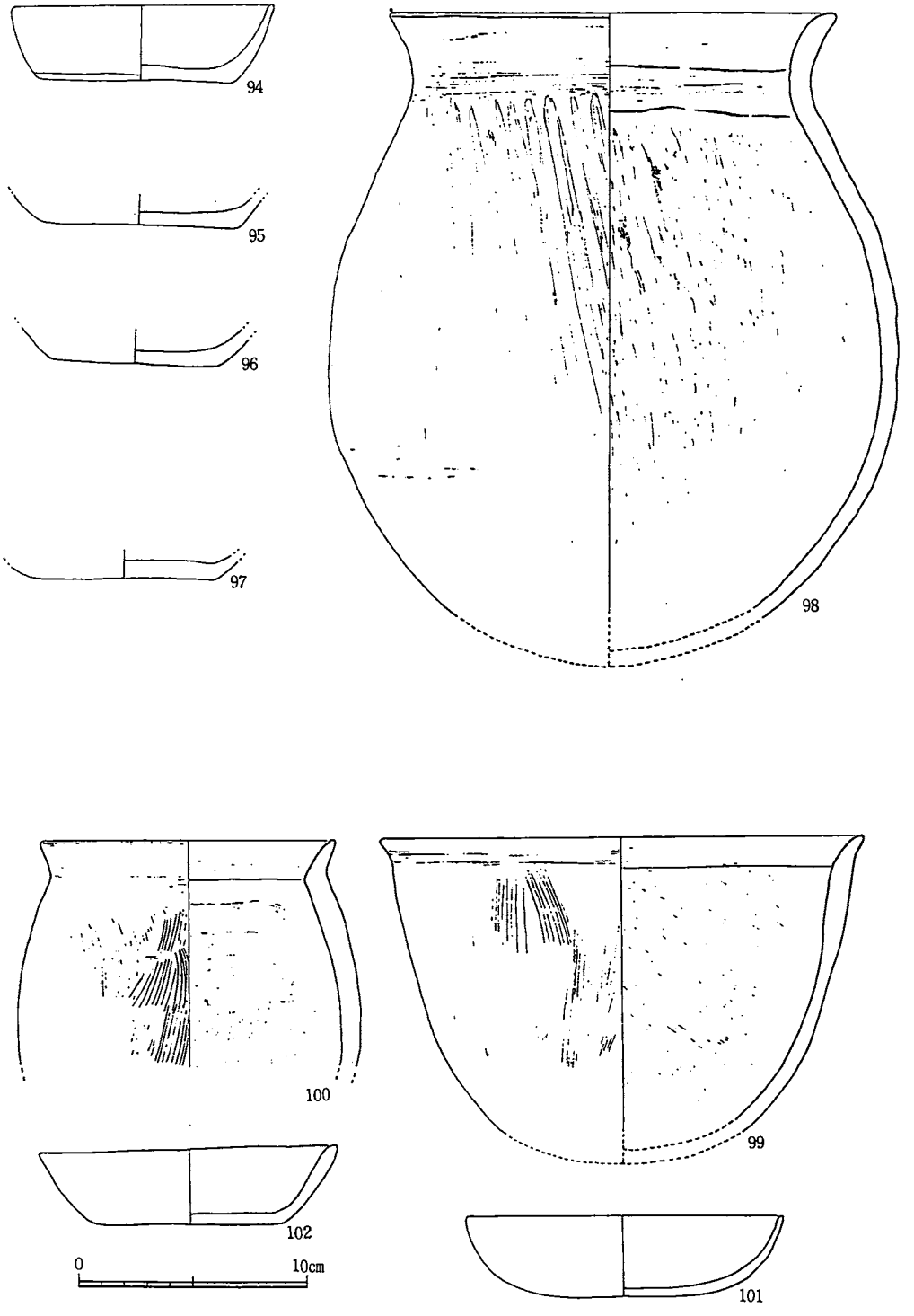
和　鏡



第16図　下井手・前田遺跡出土遺物９（土坑中）



第17図　下井手・前田遺跡出土遺物10（塚１盛土中）



第18図　下井手・前田遺跡出土遺物11（塚1周辺下層）

3　塚２と地下検出遺構（第19・20図）

塚２としたのは下井手字前田347番にある塚状の盛土で、周りは水田に囲まれている。盛土は東西に長い楕円形をしていて、大きさは東西方向が約8.5m、南北方向が約4.5mで、東と西方向は畦畔に連なっている。周辺の水田との比高差は約70cmで、盛土の最高点が標高9.01mを測る。

この塚２には、その中心部に東面した石祠があり、石祠の奥壁には「早馬」の二字が刻されている。石祠の前には二個の切石があるが、事前跡査の際確認されたとおり五輪塔の一部で、南側の火輪、北側の一つが地輪である。また盛土中にはマユミの老木があった。

この石祠は元々、塚２の西約20mのところにある塚３の上にあった。地元での聞込みによれば「凡そ20年前、塚３の周りを耕作している西山秋雄氏が換地後、現地へ移した」とのことである。現在地を「早馬さん」と呼んでいるが、それは元からのものでなかった。

（１）　塚２の試掘と土層断面（第21図）

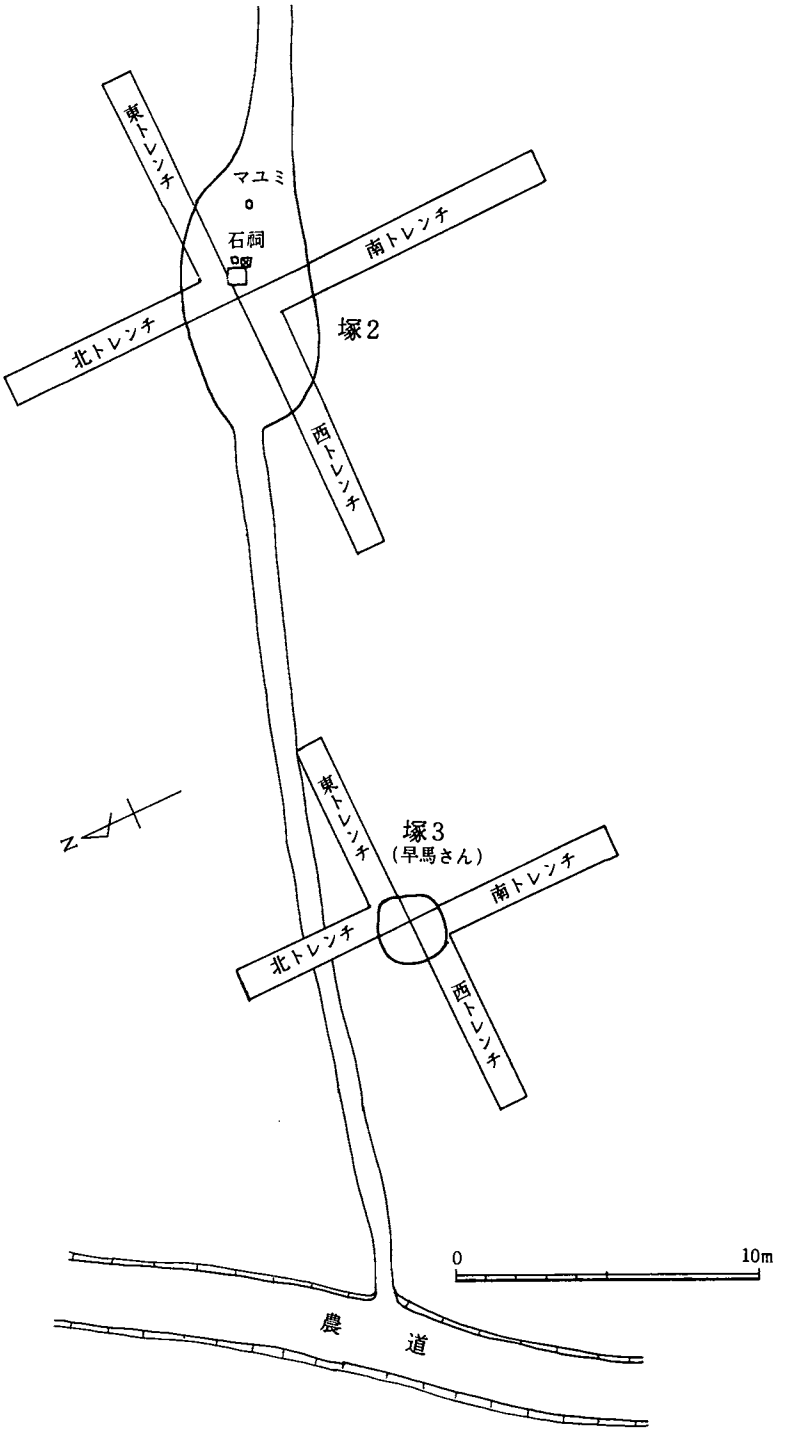
塚２の試掘は、はじめに盛土の中央と思われる地点を撰定した。ついで、この点を基点として南北、東西方向にトレンチを設定した。即ち、盛土の裾から東へ約５ｍの範囲を東トレンチとし、西へは同様に盛土の裾から約５ｍの範囲を西トレンチとした。また南北方向には盛土の裾から南へ8.2m、北へ6.2mの範囲をそれぞれ南又は北トレンチとした。発掘にあたり、将来盛土のところの$\frac{1}{4}$カットを予定して、東トレンチと北トレンチ、南トレンチと西トレンチがかぎの手になるようにした。

各トレンチの土層の状態は、第Ⅰ層耕土で水田の耕作土である。層厚20～25cm灰褐色砂質の土壌である。ここでは第Ⅱ層の層の確認に止めたが、耕土下に全面にわたって確認された。この層は暗灰褐色のやや締りのある土壌で、発掘の過程では遺物の発見はなかった。

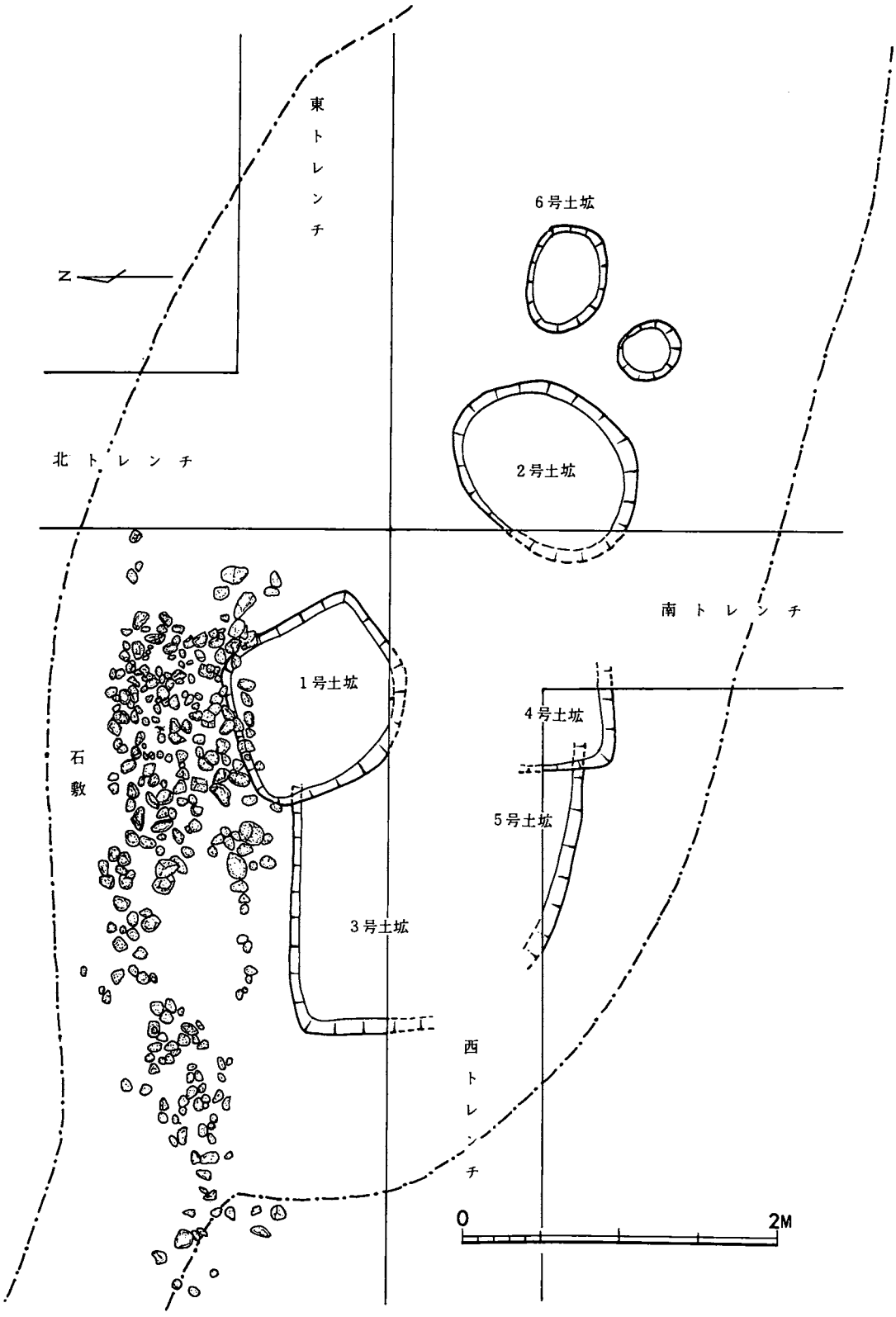
引続き、各方向のトレンチを盛土中央の交点まで延長し、盛土の$\frac{1}{4}$カットに移った。はじめカットは盛土の東北側と西南側を水田面の高さまで掘りさげ、土層断面確認のうえで、他の残りの盛土を取除くことにした。

盛土の部分での土層の最上層（Ⅰ層）は、各種の夾雑物を含んだ灰褐色～暗褐色土で、層中には多数の礫、近世瓦、陶磁器片をはじめ、ガラス、ビニール等のほかに、各時代の土器（第22図）が含まれていた。また石祠の前に五輪塔の地・火輪のあることを記したが、盛土中には五輪塔及び宝塔が混入していた。また「道智」と刻銘せるものは、土層断面中に浮いた形で出土した。この層は必らずしも単純な層ではなく、時間をかけて次々と積み上げられて現在に至ったものと考えられる。

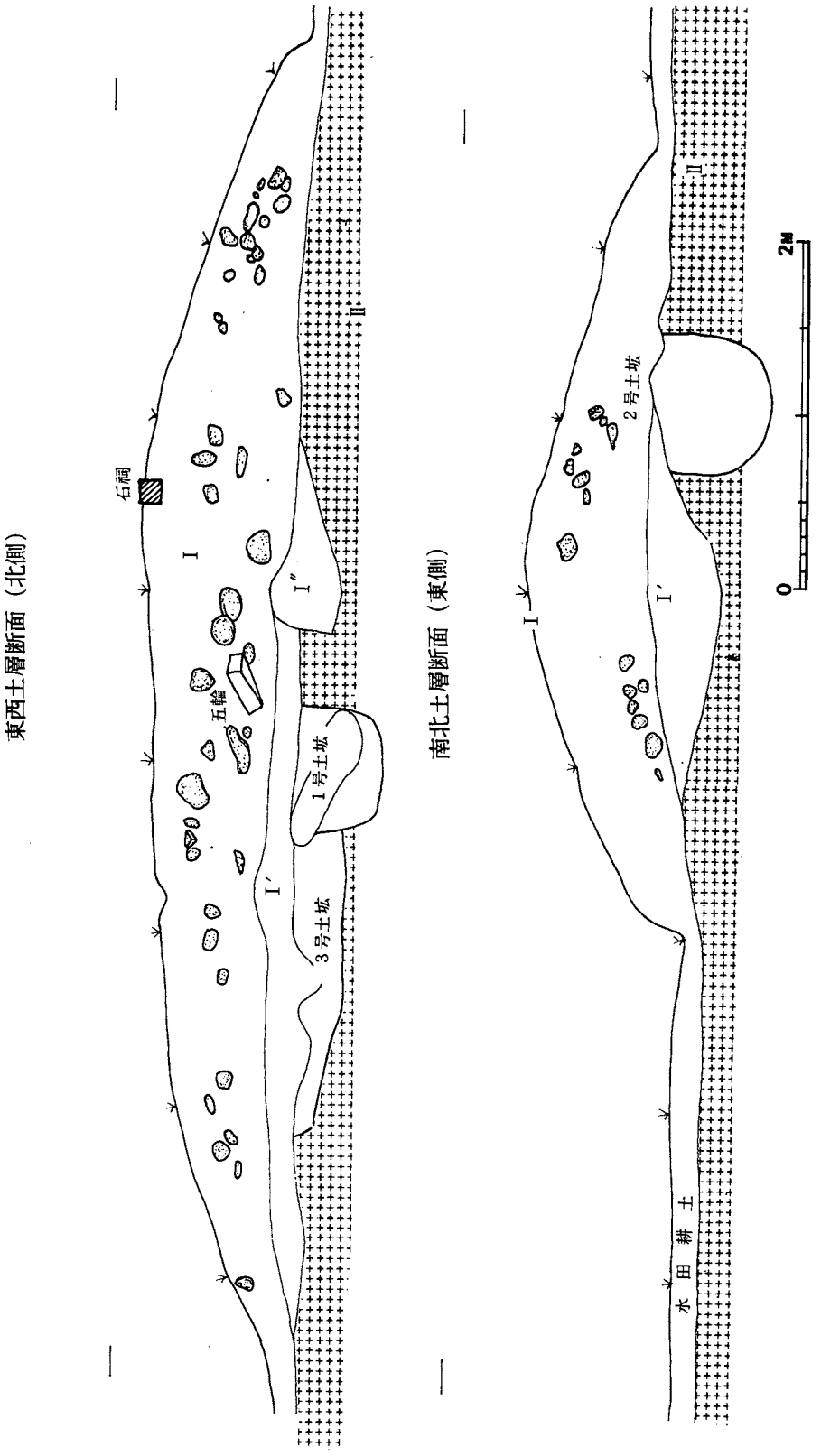
第Ⅰ層の下にⅠ′層とⅠ″層がある。Ⅰ′層は暗灰褐色の土層で、土が締っていた。Ⅰ″層も暗



第19図　下井手・前田遺跡塚２・３周辺トレンチ配置図


東トレンチ
6号土坑
N
北トレンチ
2号土坑
南トレンチ
1号土坑
4号土坑
石敷
5号土坑
3号土坑
西トレンチ
0
2M

第20図　塚２地下遺構



第21図　塚２土層断面

灰褐色土であるが、これは粘質土であった。

その他、第Ⅱ層を切込んで数個の遺構（土坑）が検出された。

（2） 盛土下検出遺構（第20図）

塚2の$\frac{1}{4}$カットにより、その断面に落ち込みのあることが発見された。調査の結果、平面形が方形（長方形）または、円形の土坑であることが判明したが、1・2の土坑を除き保存が悪かった。

1号土坑は、一辺約1m10cm、確認面からの深さ5.5cmの方形土坑で、第Ⅱ層を掘込んで作られていた。また、西側へ隣接する3号土坑を切込んでつくられているのが土層断面のうえからも確認された。1号土坑中の埋土は暗茶褐色で3号土坑の土色より濃色を呈していた。また土坑中には、灰茶褐色の木片を含んだ粘質土がブロク状に含まれていて、坑底からも腐植した木片が検出された。

2号土坑は1号土坑の東南、約2mのところに発見された。平面形は128cm×98cmの長円形で、深さ約70cmであった。土坑中の埋土は1号土坑の埋土と似ているが、やや濃色の黒茶褐色を呈していた。

1号土坑の西に接し3号土坑があるが、土坑そのものが浅く、干天という悪条件もあって、全容がはっきりしなかった。また4号土坑も同様で、上部からの攪乱が激しく、僅かにその存在を確認するに止まった。また4号土坑の西に5号土坑があったが、平面プランの一部を検出したのみで、もう一つはっきりしなかった。

塚2の東半は比較的攪乱されていなかった。発掘の結果2号土坑の東側に二個の掘込みのあることが明らかになった。6号土坑として取扱ったのは68×48cmの楕円形の土坑で、その掘込みも確かであった。埋土は黒茶褐色、掘込みの深さはおよそ45cmであった。他の一つは径38cmの円形のもので掘込みも20cmと浅いものであった。

盛土撤去後検出された遺構として、数個の土坑の他に石敷きがある。石敷きは1・3号土拡の北に幅1.2m、東西方向に約4.5mの範囲にわたって平面的に敷かれていた。個々の石は径10～20cm程度の河川礫で、一部は1号土坑の土坑内にめり込んでいた。

（3）塚2盛土中出土遺物（第22～27図）

塚2の盛土中には石礫の他に、各種の夾雑物が廃棄されていたことは既に述べたとおりである。その中の遺物は五輪塔を除きそれ自体大きな意味を持たないが、以下参考資料まで取上げることにした。

石塔類　（第23～27図）　盛土上に五輪塔の地輪、火輪のそれぞれ一個があったが、他はすべて盛土中に混入埋没していた。その発見の状況は、或物は反転しており、むしろ廃棄されたと

呼ぶにふさわしい状態であった。

第23図（120～122）に図示したのは地輪で、上の一個（120）は西トレンチの断面中にあらわれたもので、一辺上端30cm、下端が細くなって29cmである。また比較的偏平なつくりで、高さ13cmである。底には一辺約13cm、深さ2.8cmの刳り込みのあるのが特徴である。石質は阿蘇凝灰岩で、正面に「道智」の刻銘がある。

23図中央に図示した（121）は石祠の前に放置してあったが、保存は比較的良好である。多少の歪みがあるが上端26.5cm、下端25cmでやや上の方が大きい。高さは19cm位で、この地輪も下底部に10cm四方、深さ3cmの内刳りがある。凝灰岩製。

23図下（122）に図示した地輪は盛土中から出土したもので痛みがはげしい。残りの部分をもとに測定すれば、上端32cm、下端29cm、高さ13.5cmと比較的平板的なつくりのもので、形として（120）に近い。凝灰岩製。

塚2の盛土中から水輪一個が発見された。第24図上（123）に図示したのは、本遺跡唯一の水輪である。全体に歪みがあり、中央の膨らみの部位で径28.7cm、高さ18.7～20.5cmで、上・下両面は5～8mm内へ凹んでいる。器面に丹を塗られた痕跡がある。凝灰岩製。

火輪（第24・25図）は図示した4個の他、その疑いのある破片1個（図版35中左）があった。第25図中（126）が盛土上（石祠前）にあったが、他はすべて盛土中から他の遺物と混在していた。（124）は下端が約25cm（中央での反り約1.5cm）、厚味（高さ）が17.5cm、軒先はゆるくカーブしている。上端に一辺9cm、深さ6.5cmの枘穴がある。凝灰岩製、比較的量感のある火輪で、保存は稍良好。

第25図上（125）の火輪は下端の反りがないところから、平板的な印象を与える。厚さ15cm、軒先は僅かにカーブする。一辺8cmの枘穴は直に深く（約7cm）彫られている。凝灰岩製、保存は比較的良好。

第25図中（126）の火輪は地表に露出していたものの一つで、他に比べ大形である。下端の一辺34.4cm、平面形は四隅よりその中間が膨らんでいる。厚み34.4cm、軒先にはかなりの反りがある。上面には一辺10cm、深さ6cm円形の枘穴がある。この火輪の造作は粗いが、保存は良好、凝灰岩製。

第25図下（127）は大きさの割に厚味のある火輪である。保存が悪く、一部に製作時の彫琢面を残している。下端の一辺約27.5cm、高さ約16.3cm、枘穴の一辺約7cm、深さ4cm余り。凝灰岩製。

空風輪とみられる2個と、円形の宝珠状の丸石が一個出土した。第26図に示した（128～130）はいづれも損耗がはげしく、器面は一部を除き剝落磨耗している。（129）が現高17.5cm、最大幅15cmで枘と宝珠の上端を欠失している。この中でも（130）はかろうじて上下がはっきりしているもので、空風輪の形を止めている。現高18cm、枘の一部と宝珠の上端を欠いている。

(128) は直径約13cmの砲丸状の丸石で全面磨耗している。自然礫とは考えられないところから、空風輪が磨耗変形したことも考えられる。以上、第26図にあげた3個の石はいづれも凝灰岩である。

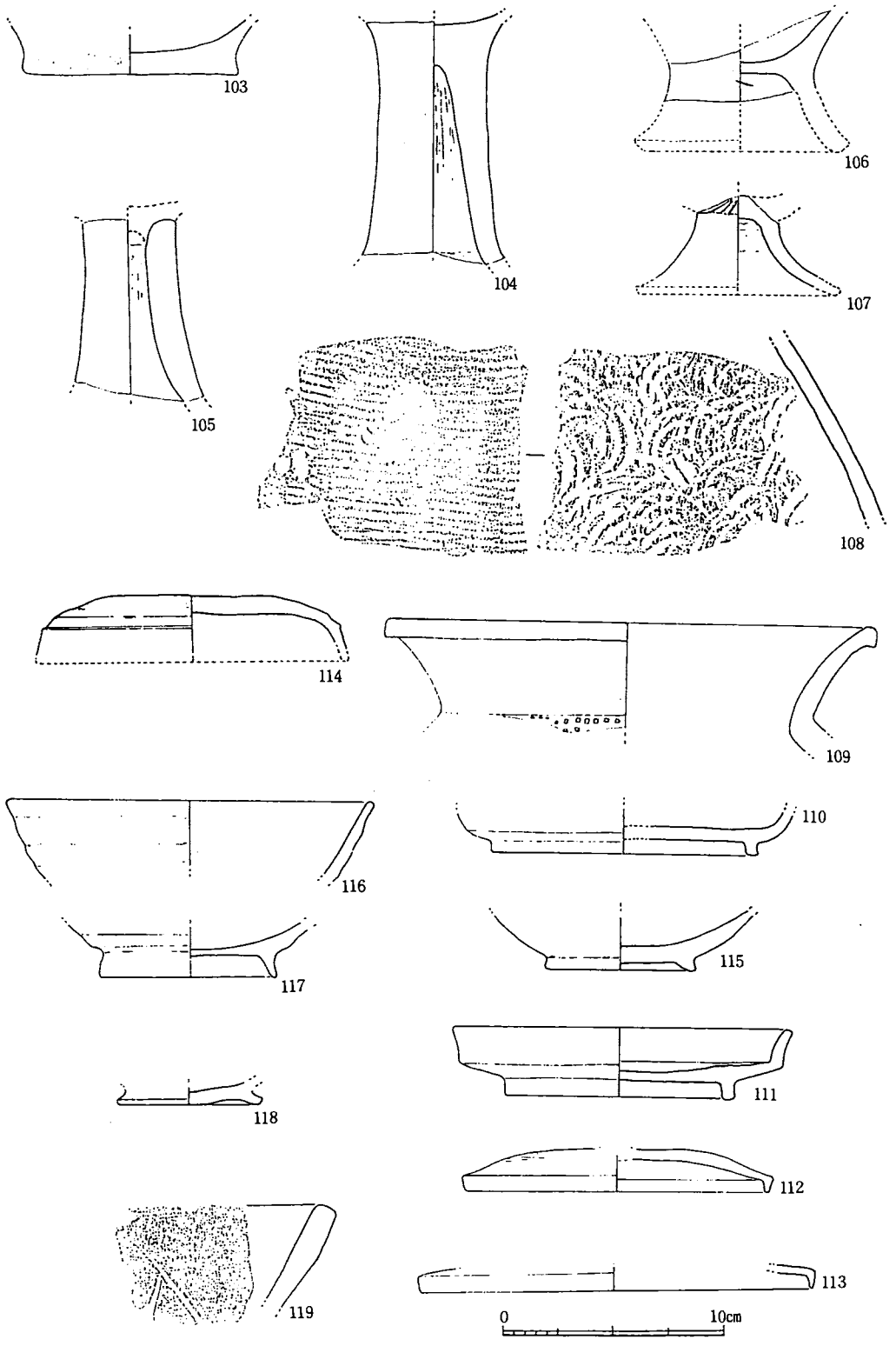
宝塔の塔身にあたる部分が一個出土している。第27図に示したのがそれで、底径19cm、高さ32.5cmで上部に枘がある。塔身の一部は欠落しているが、正面には蓮華座の上に梵字（ア）が彫られている。毛彫りで造作は比較的粗い。

塚2の盛土中から出土した遺物の中には、近世陶磁片多数があった。破片の中には小岱焼（牝小路）、擂鉢（平底のものと、高台付）、或は波佐見焼の雑器類があったが、その出土状態からしてそれ程問題として取上げる程の性質のものでないので割愛した。そこで参考までに取出したのが第22図（103～119）の遺物である。以下、図をもとに説明したい。

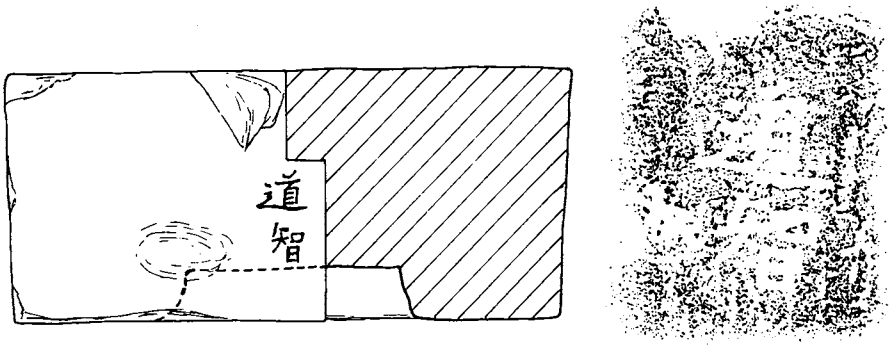
須恵器（108～115）　須恵器は甕（108）壺（109）、盤（110・111）蓋（112・113）さらに埦形（115～117）などの器形の土器が出土している。これらの遺物は周辺から持込まれたものとみられ、同時に周辺に遺跡の存在することを暗示している。

その他の遺物（103～107・119）103は縄文晩期の土器底部とみられるもので、底部の立上がりの部位に指頭圧痕がある。104・105は土師の高杯とみられるもので、脚の立上がり部分である。器面は磨耗している。106・107は弥生式土器の甕、そしてコップ形土器の脚に近い部分とみられ、弥生後期とみることが出来る。119は擂鉢の口縁の一部で、一方が片口になると考えられる。これまで、この種の擂鉢は中世遺構に伴って出土している。

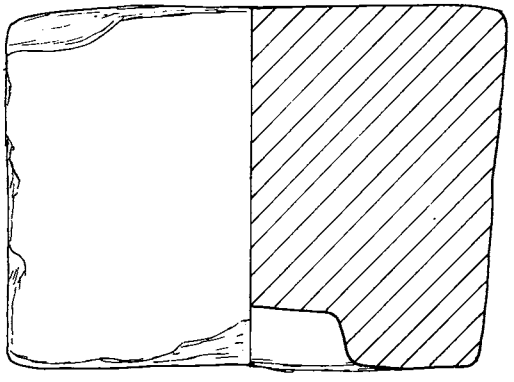
以上図示した遺物の他に、総量にしてビニール大袋5～6袋分がある。このうち須恵器は甕形のものが大部分で総量の半分を占める。ついで瓦の破片、擂鉢（平底・上げ底）、土瓶、甕、土製人形、灯明皿、油徳利、さらに陶磁では染付けのある埦、皿類があった。また化粧クリーム瓶、紅皿等もあり近世末以降数次にわたり、累積放棄されたものとみられる。



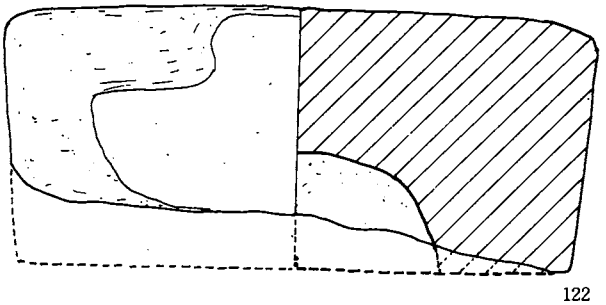
第22図　下井手・前田遺跡出土遺物12（塚２盛土中）



120



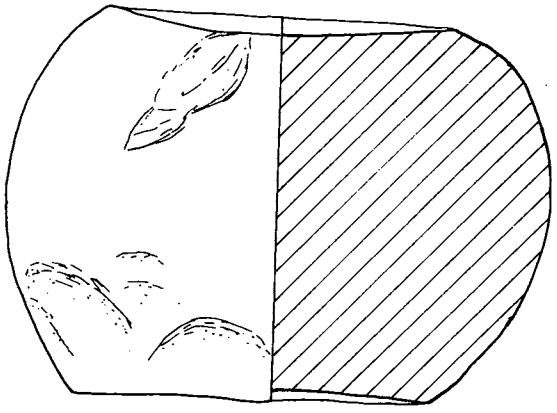
121



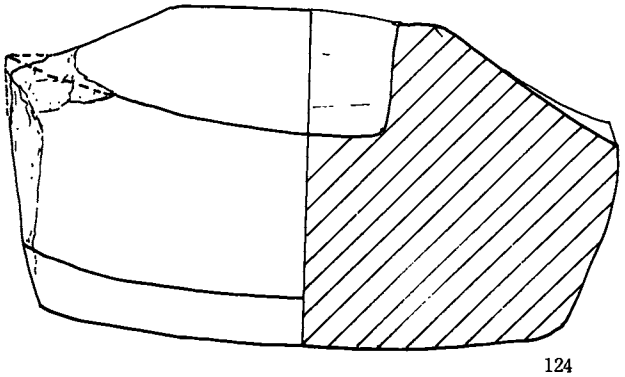
122

0 20cm

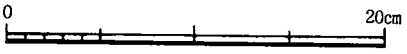
第23図　下井手・前田遺跡出土遺物13（塚２盛土中）石塔１



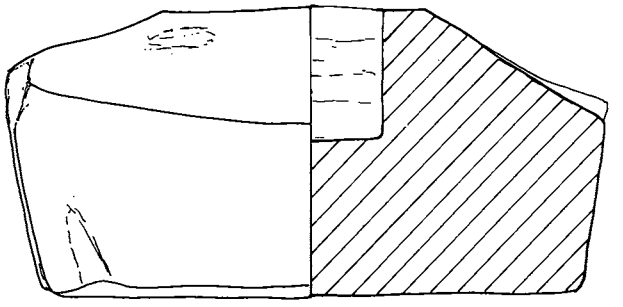
123



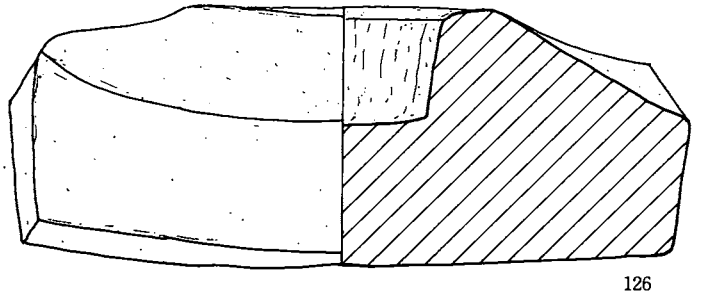
124



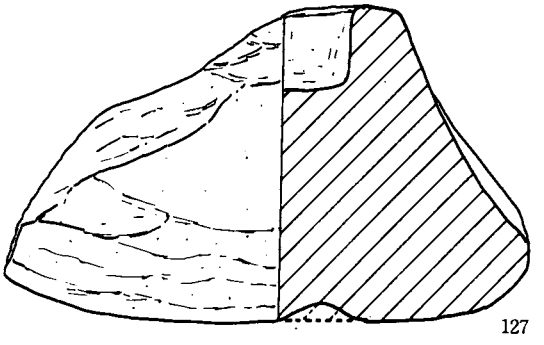
第24図　下井手・前田遺跡出土遺物14（塚２盛土中）石塔２



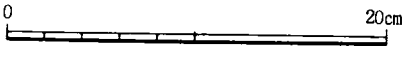
125



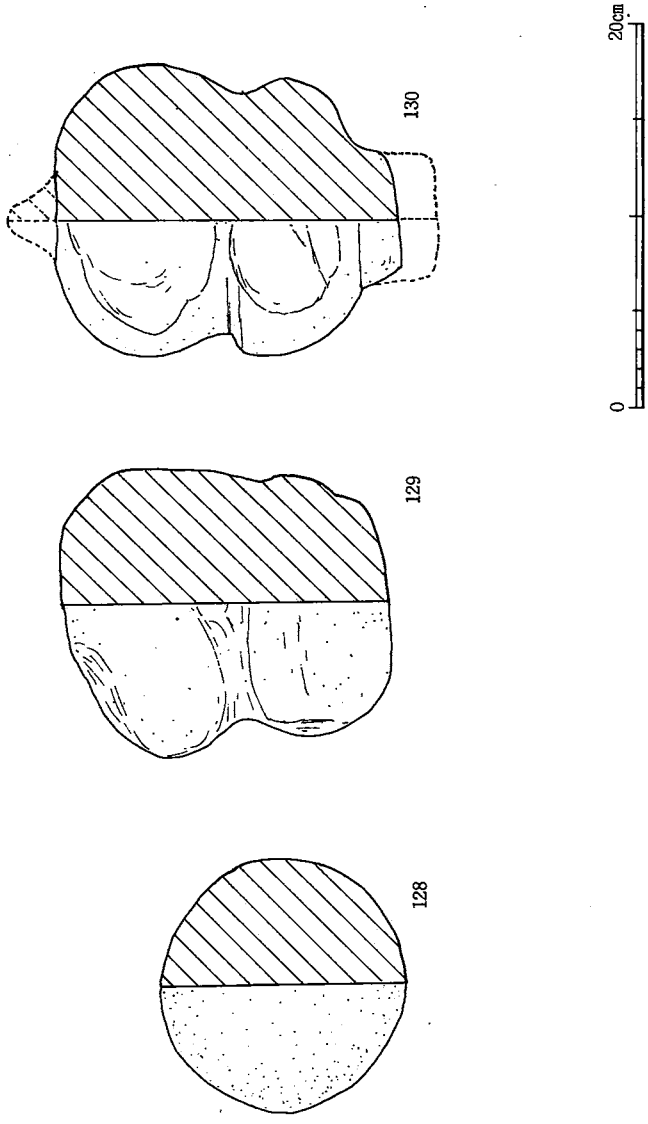
126



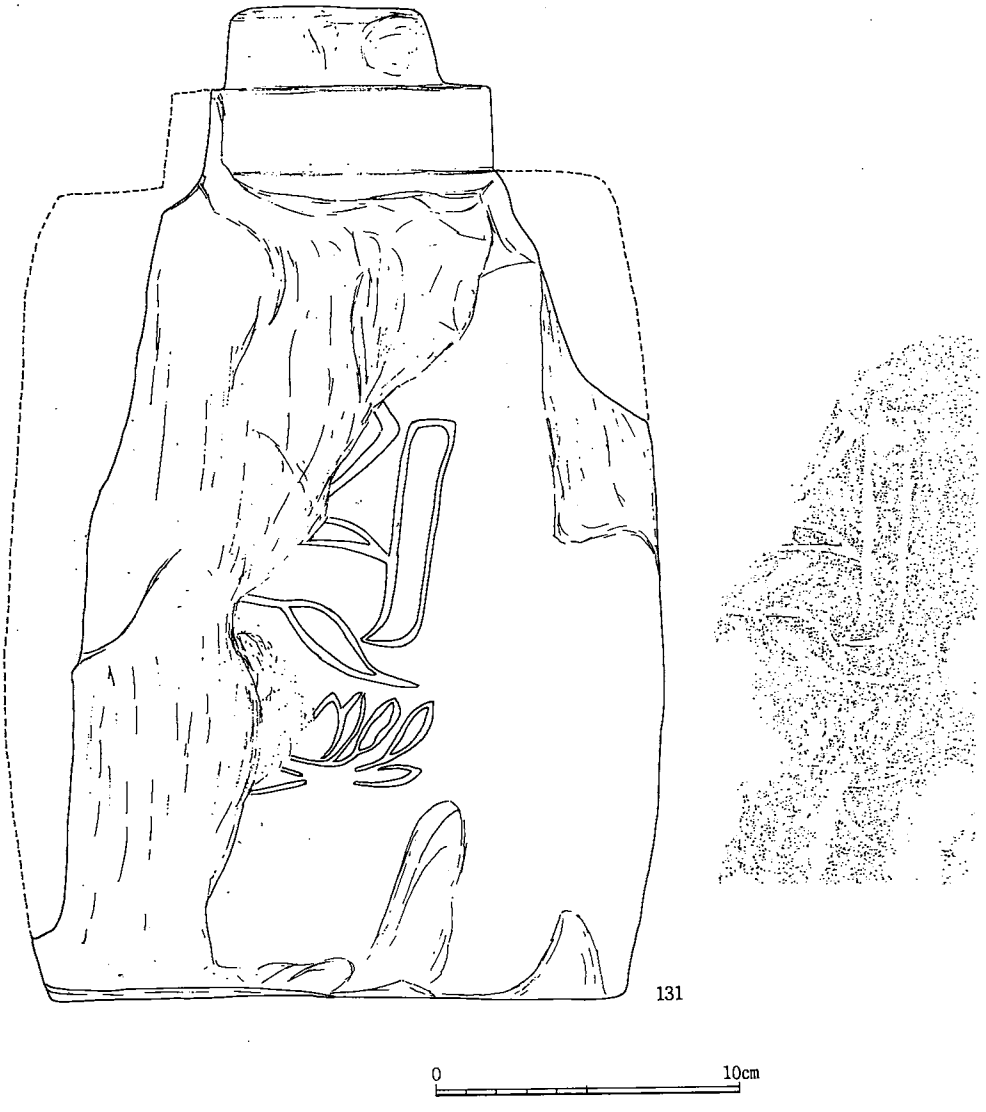
127



第25図　下井手・前田遺跡出土遺物15（塚２盛土中）石塔３



第26図　下井手・前田遺跡出土遺物16（塚２盛土中）石塔４



第27図　下井手・前田遺跡出土遺物17（塚２盛土中）石塔５

4　塚３（早馬さん）

塚３、即ち「早馬さん」は塚２の西約20m のところにある。直径２m 余の小塚で、周囲は水田に囲まれ、水田面より30cmほど盛上がっている。調査前塚２上にあった早馬さんの石祠は、塚３上にあったもので、此処が地元で言うところの「早馬さん」である。

調査は他の地点と同様、塚周辺の試掘から始めた。トレンチは塚の中心を基点として北へ７m 、南へ7.2m 、東へ6.7m 、西へ6.7m とおよそ６～７m のトレンチを設定し、その間の遺構の有無を探索した。この際、塚の本体部分は発掘をあとまわしにして（後刻½カットすることにした）、調査を円滑に実施するために北トレンチの北端を深掘りして、この地区での自然堆積層の把握につとめた。

(1)　塚３周辺の土層（第29図）

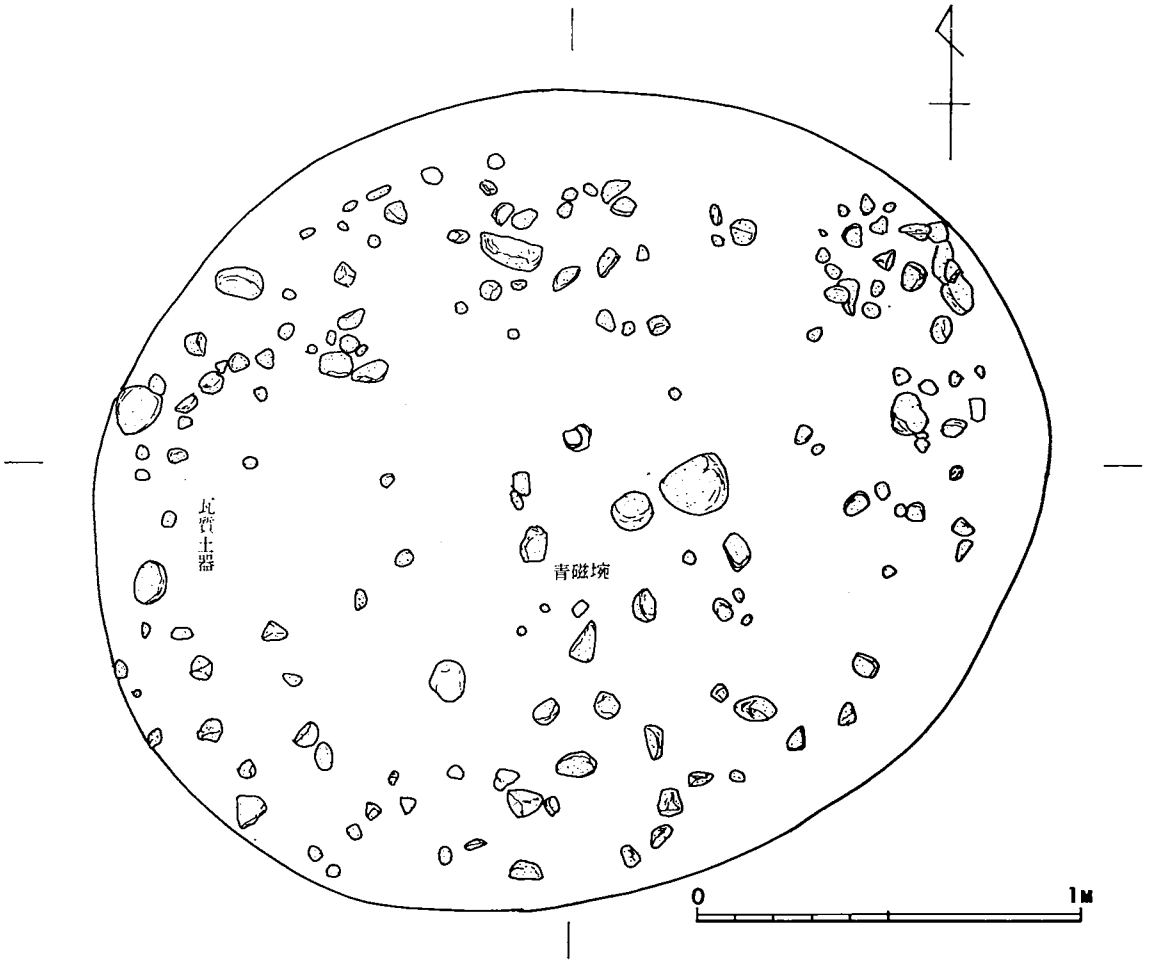
塚３の周りは水田で、第１層は耕土である。地表の起伏も多く、層厚14～24cmの暗黒色土である。各トレンチでは第Ⅱ層の一部が露出し、遺構埋没の有無を確認するに止めた。そこで、第Ⅱ層以下の土層は、北トレンチ北端部の土層をもとに説明したい。

第Ⅱ層は褐色の斑点まじりの灰色土で、北へ漸傾し36～43cmの層厚である。第Ⅲ層は第Ⅱ層より粘土分に富んだ灰色土で、褐色のたて縞の虎斑がある。層厚は17～24cmで、北の方がいく分薄い。続いて第Ⅳ層は暗灰色の粘質土層で、層厚35～38cmである。第Ⅳ層についで第Ⅴ層の青灰色土がある。この層は第Ⅳ層と同様粘質土であるが、土色のうえからもはっきり分離出来る。第Ⅴ層上面は地表下１m 10であるが、深掘地点で30cm余りの確認に止めた。

以上が塚３北トレンチ北端付近の土層の状態であるが、Ⅰ層が水田の耕作土で、Ⅱ層以下は土質及び堆積状態、現地の立地からしても数次にわたる関川の氾濫によりもたらされたものと考えられる。ここ塚３周辺での土層と、他地区とくに塚１周辺の土層との対比（実距離120m）を試みるに、河川氾濫原における土層の入組みを考慮すればにわかに対應関係を見出すことは困難である。ここでは、Ⅱ層以下が河川がもたらした自然堆積層であると述べるに止めたい。

(2)　塚３（第28・29図）

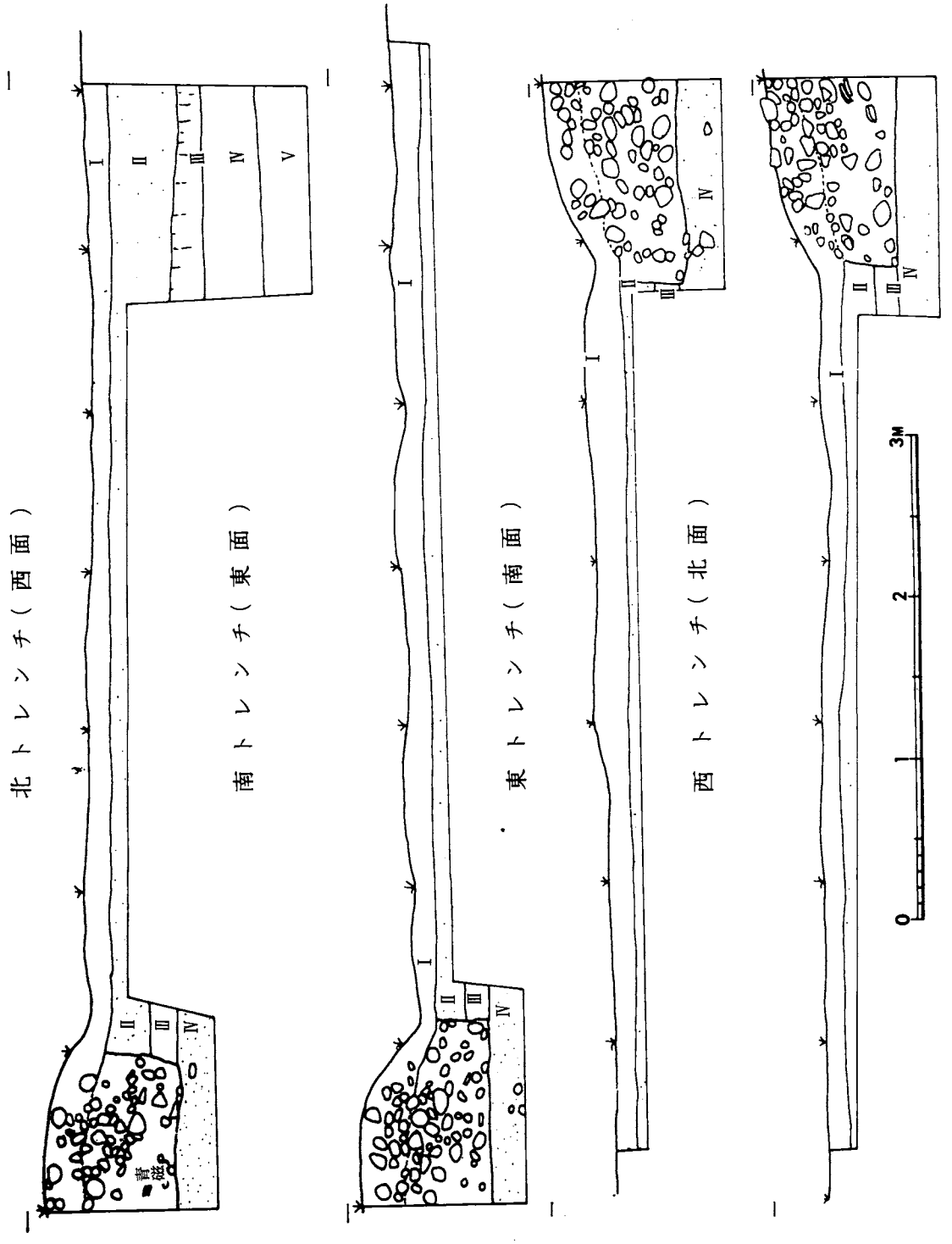
塚３はいわゆる「早馬さん」で、塚上には「早馬」と刻した石祠があった。塚２上にある石祠は後にここから移転されたものである。塚２の外貌は１辺2.2m 位の隅丸方形の小塚で、周辺の水面より約30cm盛上っていた。地表面に雑草が生え、大小の礫が盛土中に混じっていることが観察された。発掘前、地表面に陶磁片なども混在しているところから塚の形成と関係なく後の時点に礫が廃棄されたとも見られた。しかし、発掘調査の結果、多くの礫は塚そのものの形成と密接な関係のあることが判明した。



第28図　塚３（早馬さん）盛土撤去後の状況

塚３の土層断面図（第29図）によれば、地表下20cm余りには近世陶片などの廃棄物が混入していた。しかし、それ以下の築成状況からして、礫の混り方は本来的なものとみることが出来る。

塚の築成は、はじめに2.1×2.5m位の楕円形土坑が掘られる。その長軸の方向はＮＥより僅かに東に偏している。当初堀込みの際、楕円形を意識して掘ったとは考えにくく、常識的にさしわたし一間位の円形土坑が掘られたのではなかろうか。この際土坑の深さは、現地表（水田）よりの深さ50～60cmで、下面は平らにされた。また礫や粘質土の混入の状態から判断すると、順次径10～20cmの礫を粘質土に混じながら築成されたものと考えられる。築成は中央部を高めに（高さ約90cm）、周辺はいく分低めになるように構築されている。



第29図　塚３周辺土層断面図

塚3（早馬さん）発掘にあたり気付いたことは、築成に用いられた礫は河川礫を主に用いているものの、安山岩あり、阿蘇熔岩、軽石と雑多であることである。また石礫の中に混って発見された土器も各時期に亘っている。弥生式土器、土師器、須恵器さらに瓦器、青磁に及んでいる。これらの遺物は破片ではあるが混入として処置するには遺物の量が余りにも多かった。

一般的に、祭祀的行為には儀式が伴うものである。「早馬さん」を勧請、奉祀するには当然のことながら何らかの儀式が執り行われたものと考えられるが、単に遺構の面からだけでこれを明らかにすることは困難である。遺構としての早馬さんは、遺物混入の状態から近世～中世まで遡るものと考えられる。

〔3〕 塚3出土遺物（第30・31図）

塚3（早馬さん）の盛土中から、各種・各期にわたる遺物が発見された。中には地表近くに近世陶片、瓦片もあったが、いづれも江戸末から現代に及ぶものとみられ、これらは一つ一つ取上げることをしなかった。

弥生式土器　132～135はそれで、132は弥生後期の甕形土器の脚の部分である。褐色の器面は磨耗がはげしい。133・134は弥生後期の壺形土器の胴部で、器面調整には古い技法（刷毛目が粗く箆均し）が観察される。二者はよく似た器形ではあるが別個の個体である。面の器面の色調は133が黄白色で、134は橙褐色をしている。それぞれ一乃至二条の突帯があり、突帯上に斜方向の押圧施文がある。135も弥生式土器で壺形土器の頚から肩にかけての部位の破片である。頚のつけねに一条の突帯があり、器面の色調は黄褐色であれている。これは弥生後期とみてよかろう。

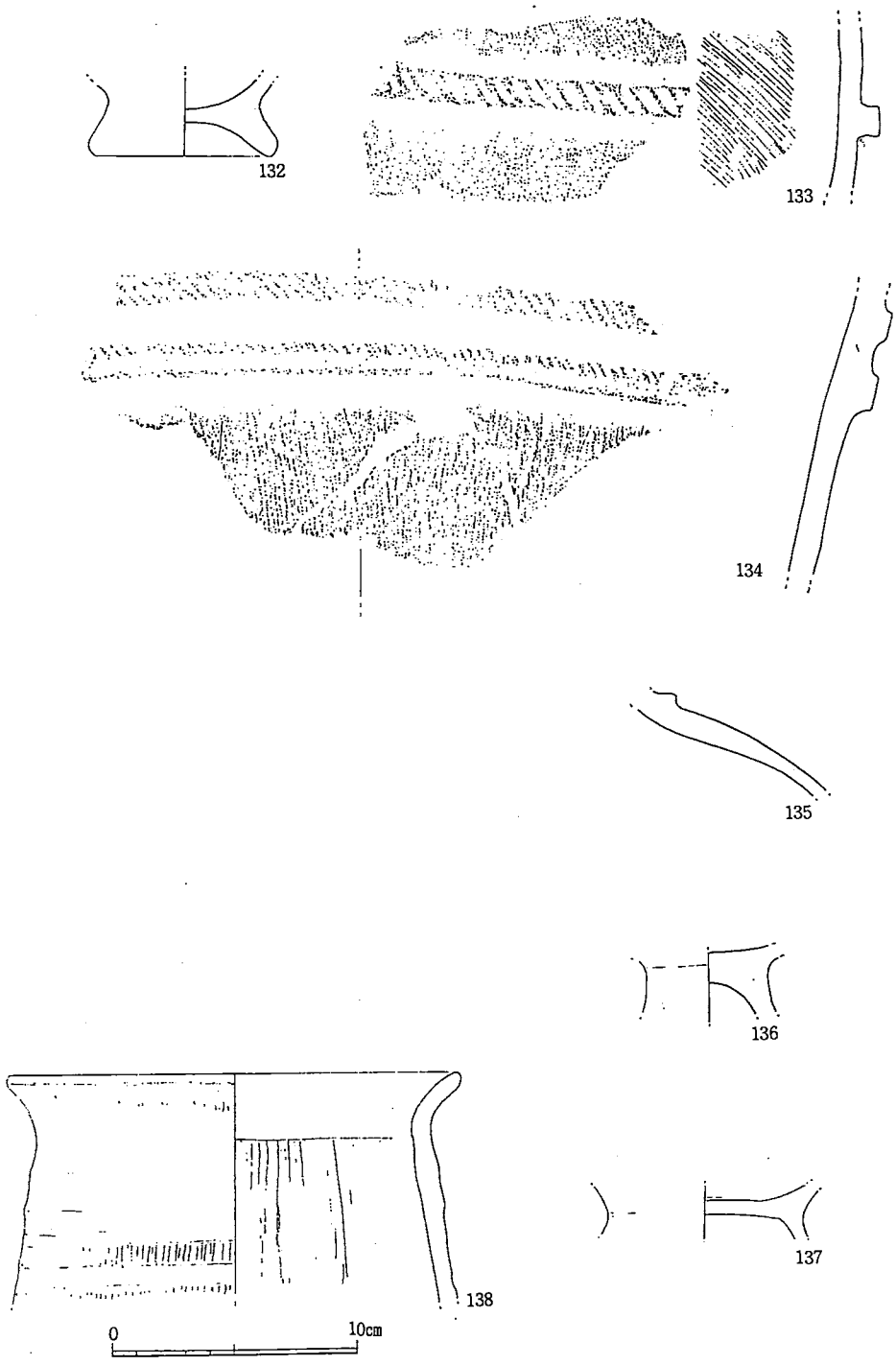
土師器　136・138は土師器の破片で、高坏及び甕形土器である。甕形土器の器面調整には特徴があり、横へなでたあとを刷毛にて調整している。

須恵器　139～146がそれで、146は埦状の器形が、139は盤、140～142は壺形の器形が考えられる。また146は灰白色焼成不良の破片であるが、139は焼成良好なねづみ色の土器で、口縁下に櫛目波状文がある。141・142は同類又は同一個体とみられ、胴部に鍔状の突帯をめぐらす特徴ある土器である。この種の土器は、これまで県内でも多数の出土事例があり、通常長頚が上部につく。出土例には、骨壺としての使用例が知られている。

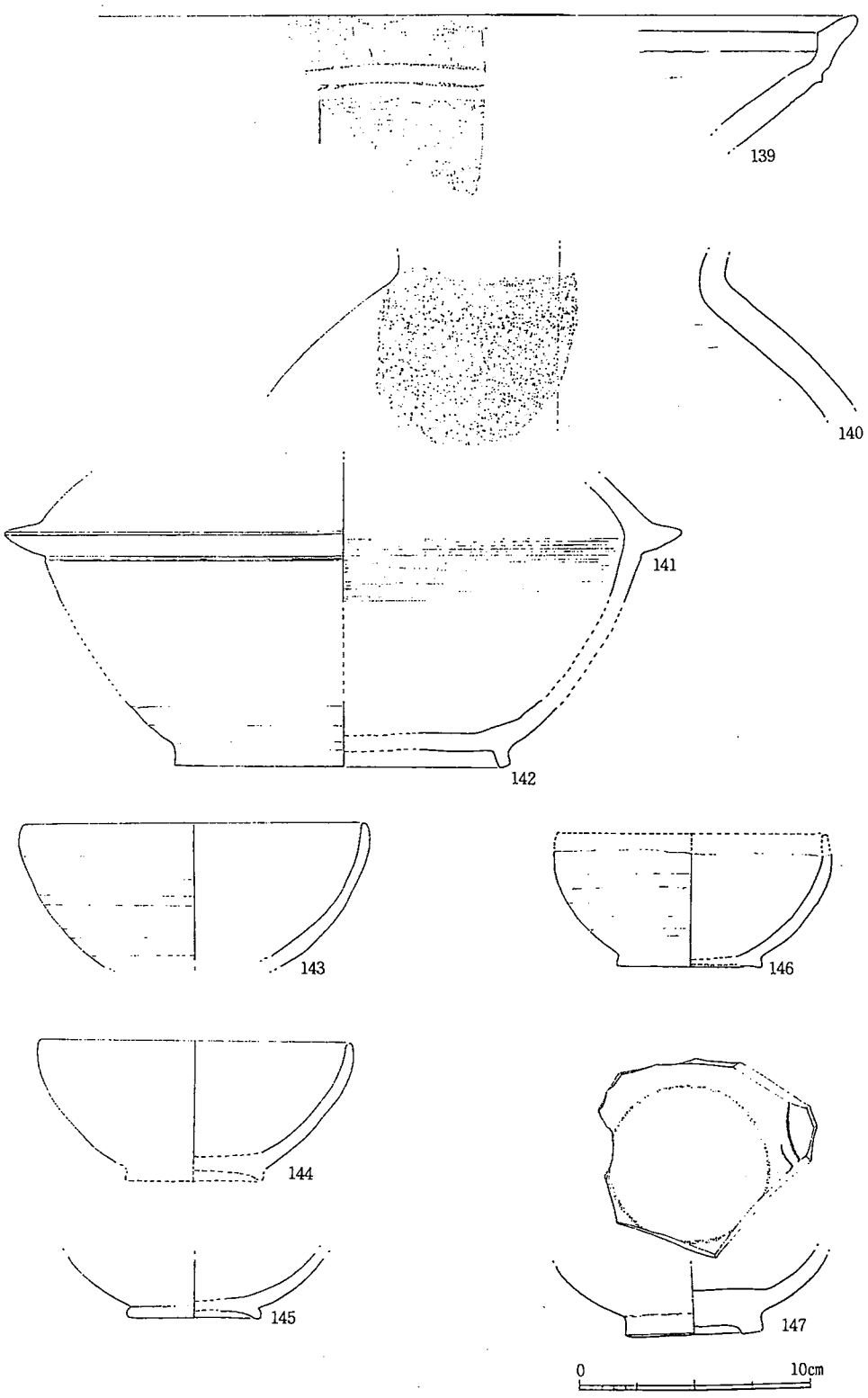
瓦　器　143～145が瓦質の埦で、礫層中発見のものである。灰白色軟質の土器で、部分的にくろずんでいる。底部は上げ底で、その端末が外に開いている。体部は膨らみをもって口縁部へと移行している。

青　磁　147は舶載青磁の破片で、重量感のある埦である。内面に花弁とみられる文様が観察され、器面には貫入がある。明代のものであろう。

塚3の盛土中から、**石鍋**（図版31下）の破片が出土している。小破片で図示困難であり説明するに止めたい。石鍋は滑石製で厚味が1.6～1.2cmの胴から底への移行部である。外面には煤が付着している。



第30図　下井手・前田遺跡出土遺物18（早馬さん）



第31図　下井手・前田遺跡出土遺物19（早馬さん）

四　下井手・前田遺跡調査のまとめ

塚１とその周辺

まづ塚１と標示したものは果して何であったか。まづ発掘調査の結果に基づき、これについての解答を与えなければならない。この塚は地番をもっていることから考えると、満更新らものと言いきれない。しかし、盛土部分を発掘、地下の埋没遺構の有無を確かめた結果、とくに遺構というべきものは検出されなかった。第Ⅱ層の自然堆積土の上に礫等の廃棄物を捨て、時の経過と共に山積した。それは周辺畑地からの放棄されたものも少なくなかった様で、また廃棄物の種類混入の具合から現代まで及んでいた。

この塚１について〝矢差し〟という名称、さきに述べた地番、また塚を挾んで北側の畑（水田）に〝天神森〟という通り名が残っている。これらの事実について勘案すれば、塚１の盛土の形成は必らずも新らしいものでなく、少なくとも江戸期にまで遡ることは確かである。

塚１周辺の試掘の結果、期せずしてプライマリーな遺物包含層の存在が確認された。包含層は上下二層にわたり、土器などの遺物が発見された。これらの遺物について一通り検討しておく必要がある。

調査現場は現地の状況から関川の氾濫原とみられる。これは調査地域での土層断面からも推測することが出来、恐らくこの一帯は川の氾濫により土砂の流亡堆積したものと考えられる。そこで、これらの事象と遺構遺物をどの様に関係づけたらよいのだろうか。

出土遺物を見る限り、器面に多少とも磨耗のあとがあるにしても、土砂流亡によりローリングを受けたとは考えにくい。何よりも上位の包含層が黒く汚染されていて、遺構が検出されたことは遺物の二次的堆積でないことを物語っている。

塚１西側拡大区で発見された遺構、即ち土坑から鏡をはじめ、小形滑石製品（連坏）、完形の土師器の皿数枚が出土した。鏡の形式は鎌倉期の蓬莱鏡ということで、県内では初めての発見である。この出土状況からすると、何らかの祭祀行為に伴っての遺物ではないかと見ることが出来る。それが何のための祭祀行為なのか、それ以上追及することは今のところ困難である。

塚２と石塔類

塚２の盛土を調査した結果、中から多数の石塔類が出土した。それは五輪塔の残欠がその大部分であるが、中には宝塔の塔身一基が含まれていた。そこで問題となるのは、盛土撤去後に検出された土坑との関連である。

塚２の盛土上には「早馬さん」の石祠の他、地輪・水輪の各一があった。石祠が隣接の塚３から移転されたことと相俟って、五輪塔の残欠も他から搬入されたとも考えられないでもなかっ

た。しかるに、その後盛土の発堀により多数の石塔類が発見され、さらにそれが盛土下の土坑と無縁のものでないものと考えられるに至った。

土坑は方形または円形と形が必らずしも一定しないが、そのいくつかは土坑中に木片が遺存するなど墓坑（早桶又は木箱）とみるにふさわしい状態であった。この地域には五輪塔数基の他、宝塔まで立並んでいた。その中の一つには「道智」と戒名を記されていたが、その人物を特定することは難かしい。ここでの石塔群は、これまでの調査事例に出てくる、惣墓的中世墓とは様相を異にしていて、中世末の特定の階層の墓地とみることが出来る。

塚3、いわゆる早馬さん

今次の調査で、期せずして「早馬さん」を発掘調査することになった。調査前に、三の宮神社の神官により祝詞奏上のうえ「お祓らい」をしたことにより、事故もなく無事発掘調査が出来たことは何はともあれ〝めでたし、めでたし〟である。

早馬さんの鎮壇築造については本文中に記したとおりである。そこで、ここでは早馬さんについて記すことにしたい。

熊本県内では、早馬さんの他、早馬塚、葉山さん、或は羽山などの呼び名の地名や祠が県内各地に点在する。今ではその多くが畑の片隅などに押やられ、石捨て場などとなっているのが実状で、農耕社会の構造的変化とともに、その神威も劣え果てている。

ここ下井手の「早馬さん」、その効験のほどを教えてくれたのは、古庄原に住む宮崎進さん（85才）である。宮崎さんは調査中しばしば現地に顔を出し、地元での言い伝えなど話題を提供してくれた。その話の一つに

若い頃、畑を鋤耕していたら、突然馬が止ったまゝ動こうとしなかった。まるで金縛りにでもあった様で、困り果て「早馬さん」に供物をもってお参りをした。ところが効果てきめんというか、あれほど処置に困っていた馬が、今までのこと忘れたようにしてスイスイと農作業を続けることが出来た。

この話には誇張と多少のフィクションを含んでいるかも知れない。ここでは早馬さんが牛馬の神様であることを知るには充分である。

地元では確かに早馬さんに祀られているのは「馬頭観音」であるとも言っている。このことは地元の研究者、福島作蔵氏が「はやまさん信仰」[注1]でとくに指摘するところで、野原八幡宮近くの公民館横にある地蔵さん(1858造建)は印相、像容からして実は馬頭観音で、また今寺入口の「早馬さんの石祠」、菰屋の「ぜんげじさん」についても同類の石仏などの事例を挙げて説明している。

県内各地にも多数の同名の地名や小祠がある。それが、今次期せずして発掘調査を実施した

「早馬さん」と、同一の信仰に由来するかどうかについて今後検討を俟っとして、さらに「東北地方に多い作神信仰の一つ」[注2]とされる葉山信仰との比較についても併せて検討する必要があろう。

注1　福島作蔵「はやまさんの信仰」『野原の庄』第2号　昭和54年荒尾市中央公民館発行

注2　岩崎敏夫「はやましんこう」『民族事典』昭和47年弘文堂

追　記

塚2より発見された石塔類については、調査後実測図を作成した。その後、保存のため荒尾市に返換した。荒尾市では、現在 中央公民館横に一括保管されている。

付　　論

荒尾市下井手・前田出土の蓬莱双鳥鏡

東京国立博物館考古課主任研究官

関　　秀夫

荒尾市下井手・前田出土の蓬莱双鳥鏡

関　　秀夫（東京国立博物館考古課主任研究官）

昭和58年6月26日、圃場整備に伴う調査中に荒尾市下井手字前田の水田中において、土師器や須恵器に混入して1面の銅鏡が発見された。この銅鏡は、径11.20～11.28cmの鏡で、鏡背の文様等から一般に和鏡と呼ばれているものの一つである。鏡面は縁辺部から中心部にかけてわずかな盛りあがりがみられる。また鏡面・背面ともに全面がうすい緑錆におおわれてはいるものの損傷もなく、比較的良好な遺存状態である。鏡背は、断面図をみてもわかるように、やや内傾した厚みのある高い縁（縁巾0.3cm、高1.0cm）でふちどられ、中心部には放射状に細い菊の花弁を配した、径2.2cmの菊座の鈕をこらしえている。鏡背の面は、これらの鈕と縁との間の面を1本の界線により内区と外区との2区に分けられているが、両区にまたがり、こまかい文様が鋳出されている。文様は、内区の左右に岩山がそびえ、岩山には松と竹とが生い茂り、内区の左上部には2羽の鳥が飛び交っている。このような鏡背の文様が、東海の神仙である蓬莱山をあらわしているところから、この種の和鏡は蓬莱鏡の名でも呼ばれている。重量は173.5gである。

これまでの発見例からみて、蓬莱神仙の図様は鎌倉時代になってはじめて和鏡の鏡背文様として定着したものである。この文様は不老不死など吉祥や長寿を祈念する意味あいもこめられ、時には鶴と亀、あるいは松・竹・梅などの取り合わせも行なわれるなどして、多くの人々に好まれ、江戸時代の末頃まで盛行をみている。図版38～40にあげた5例は、図版38上が蓬莱鏡の前段階と考えられる平安時代の和鏡、図版38下は蓬莱鏡の基準資料である正中2年（1325）の墨書銘を持つ千葉県大戸神社所蔵の鏡、図版39上と下は鎌倉時代後半から室町時代の初期にかけて良くみられる蓬莱鏡の典型的な例、図版40上は室町時代の特徴が界圏等の鏡背文様構成に良くあらわれているもので、文和4年（1355）の刻銘があるものである。図版38下～図版40上の蓬莱鏡は、いずれも鏡背の右方に巨大な岩山と、その上に生い茂る松、左方には鶴あるいは飛ぶ鳥、さらには下方に荒い波涛を描いている。鏡によって多少のちがいはあるが、基本的な文様構成の要素はほとんど同じである。このような鎌倉時代以後の蓬莱鏡の文様の構図は、先行する平安時代の和鏡に例の多い山水双鳥鏡の鏡背文様と、文様構成が非常に良く似ており、構図的には深い関連があるものと考えられている。山形県羽黒山御手洗池出土の山水双鳥鏡（図版38上）は、羽黒鏡の名でも知られる平安時代の和鏡であるが、この鏡では鏡背の右方に山、左方には2羽の鳥、下方には水波を配した文様が鋳出されている。注意深くみるとこの構図は、表現上の技法的な相違はあるものの、鎌倉時代の蓬莱鏡の鏡背文様の構図にそっくり引きつがれていることがわかる。

今回出土した蓬莱鏡図版40下は、鏡背文様からみると図版39・40上と製作年代が近く、鏡そのものとしては、平安時代や鎌倉時代前半の和鏡にくらべ、鏡胎が厚く、鏡背文様も肉が高い。また縁も高く、縁幅も広く、量感もあり、鎌倉時代も終り頃に製作されたものと考えられよう。

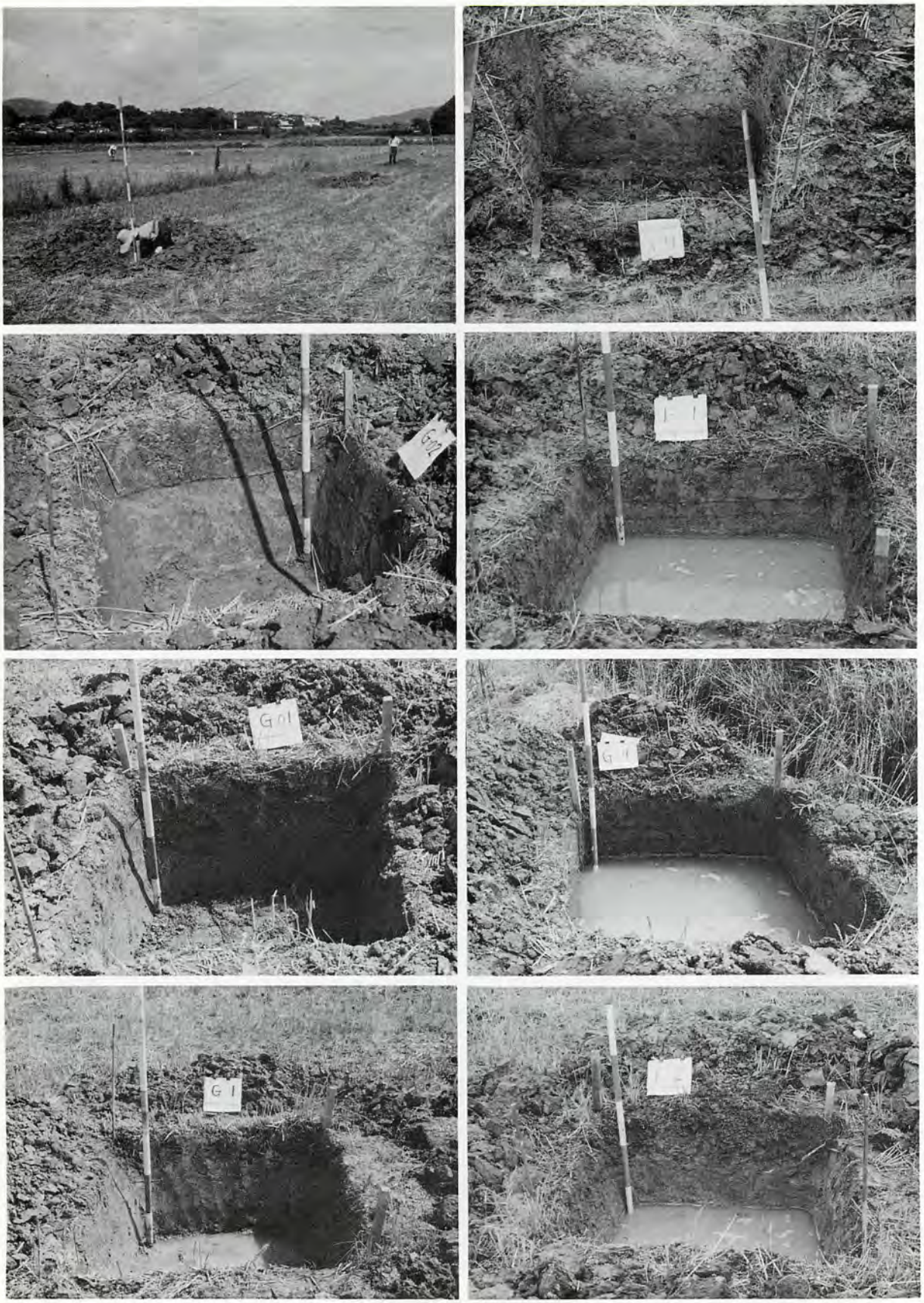
図　　版

西から

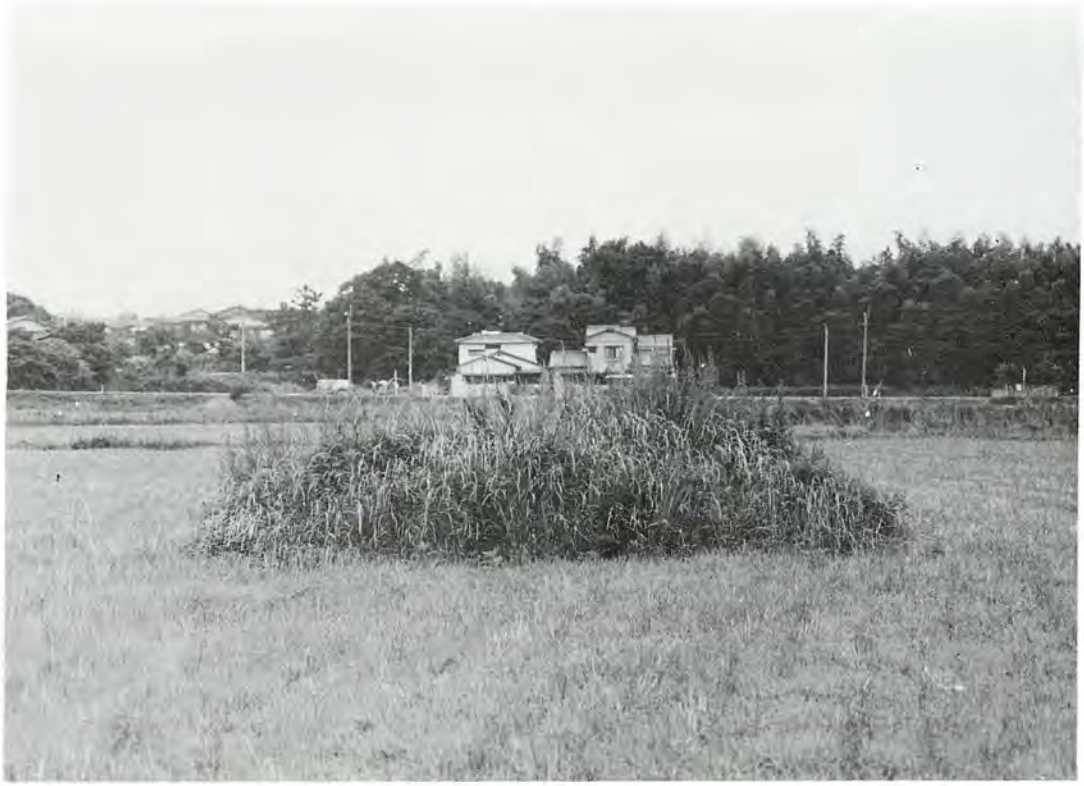
東から

下井手・前田遺跡景観

図版2



下井手・前田遺跡の試掘

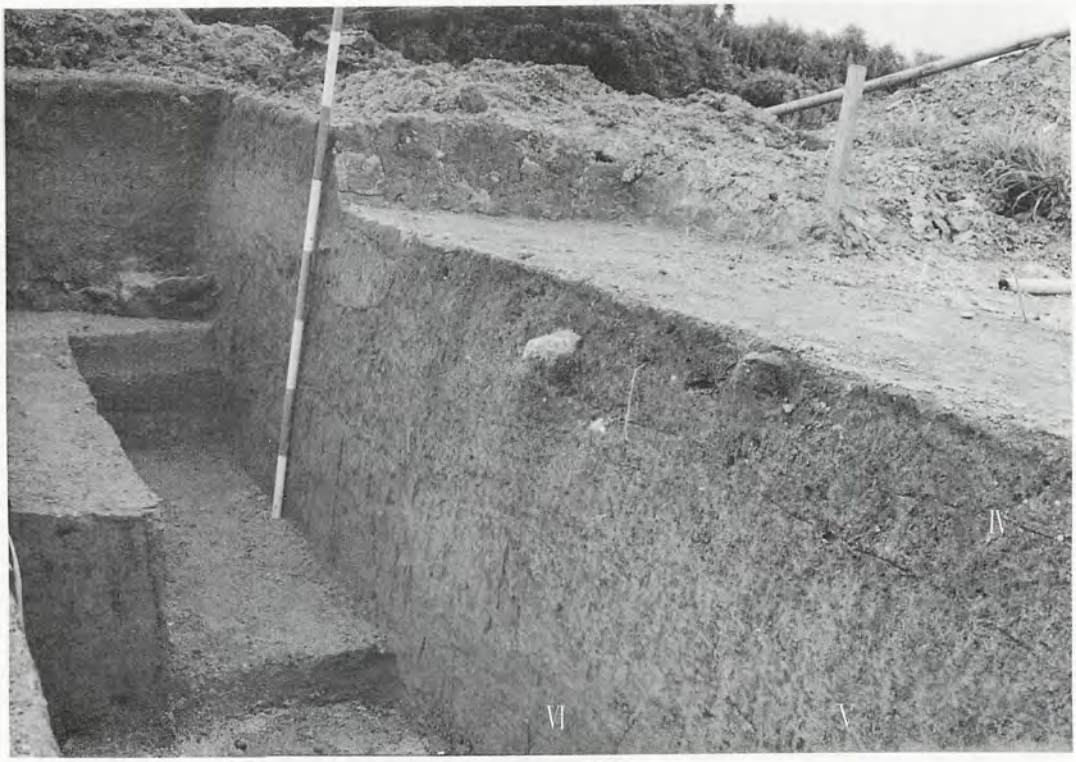


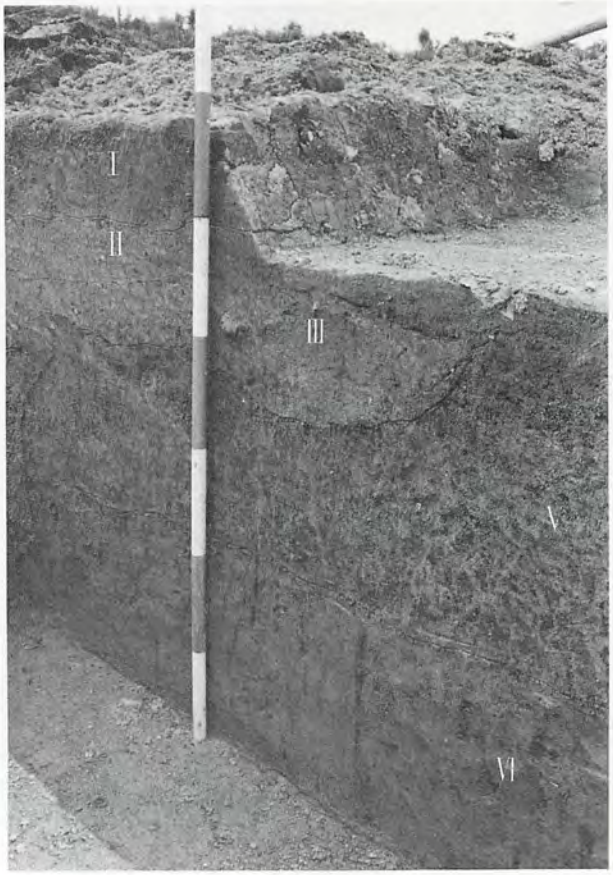
北から

南から

塚1発掘前

図版4



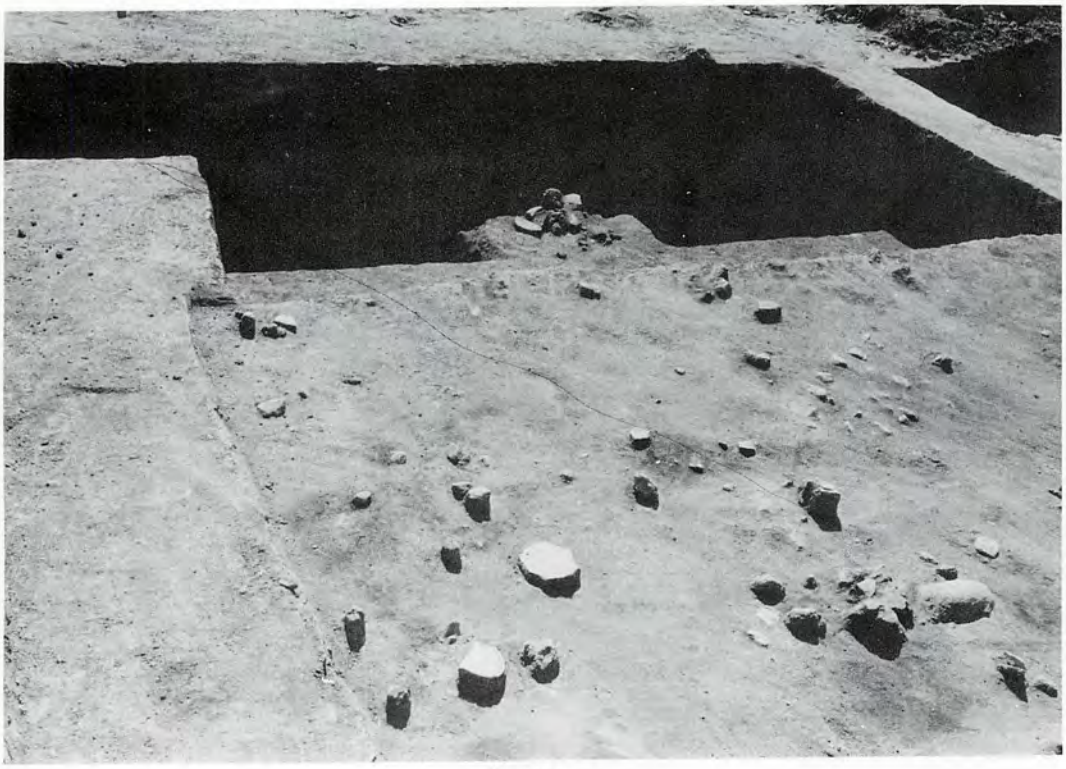


下井手・前田遺跡塚Ⅰ周辺土層

南から

南西部分

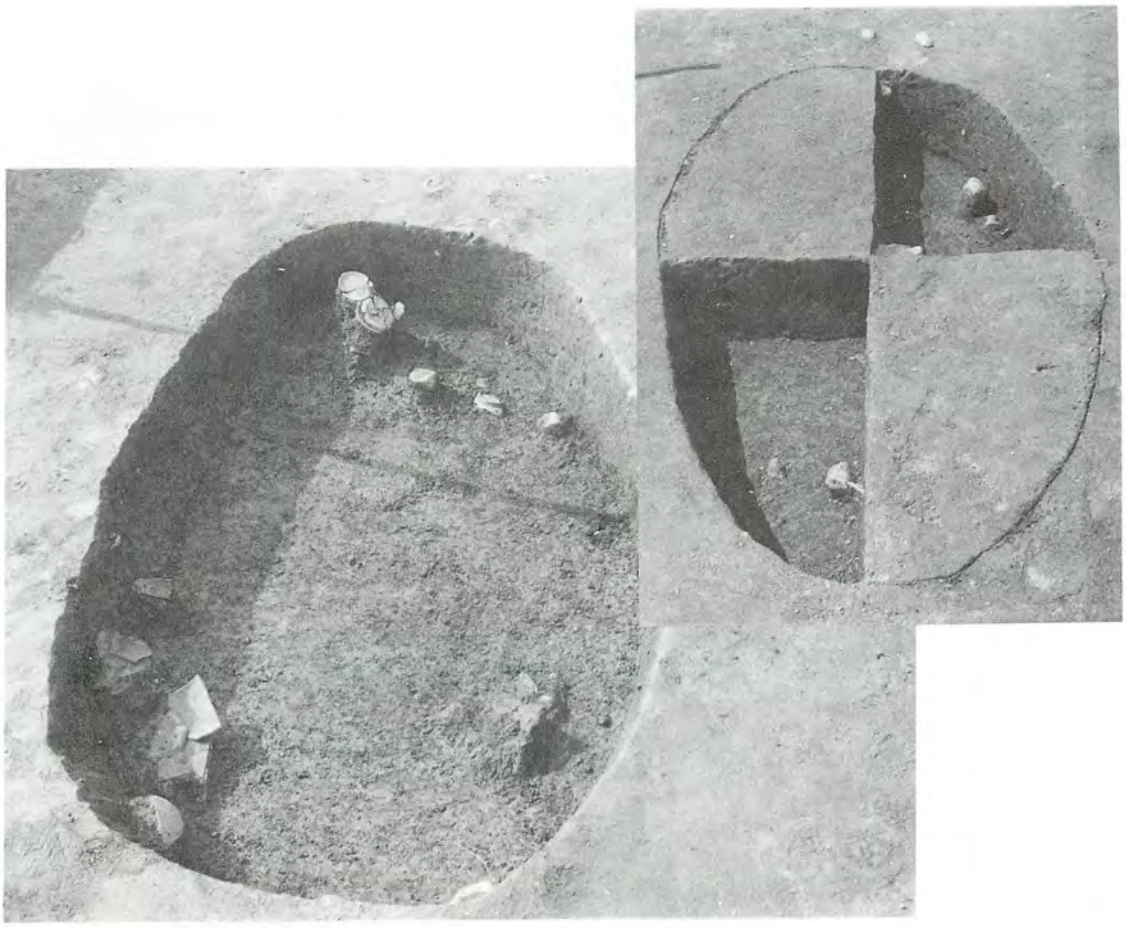
塚1西拡大区上層遺物出土状態1



北西から

北から（中央黒い部分は土坑）

塚１西拡大区上層遺物出土状態２

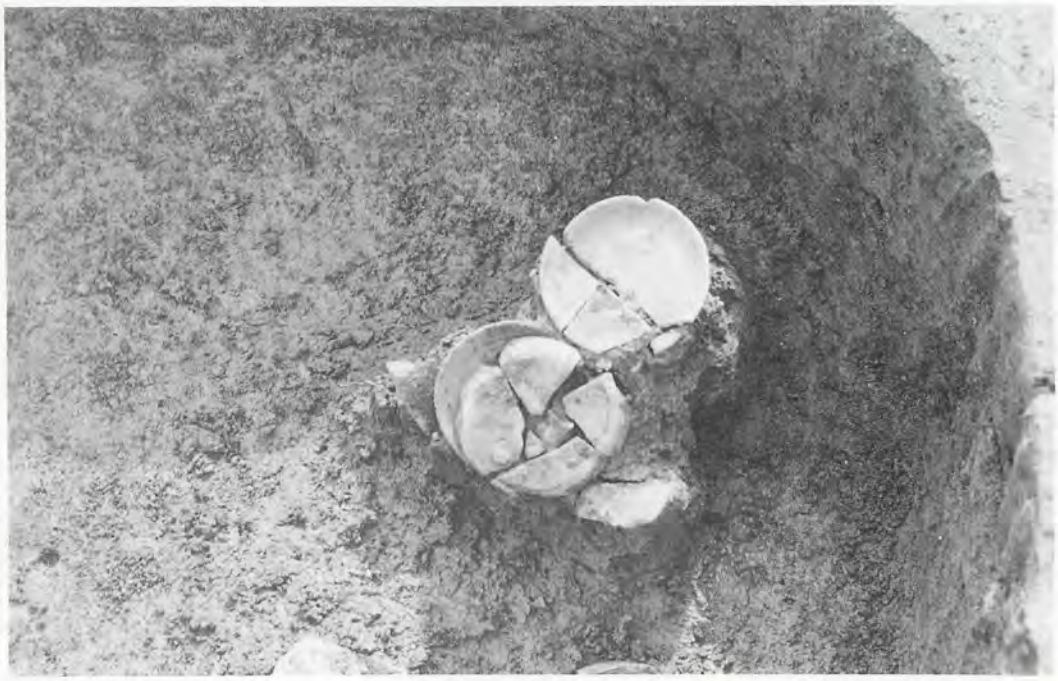


西拡大区発見土坑

図版8

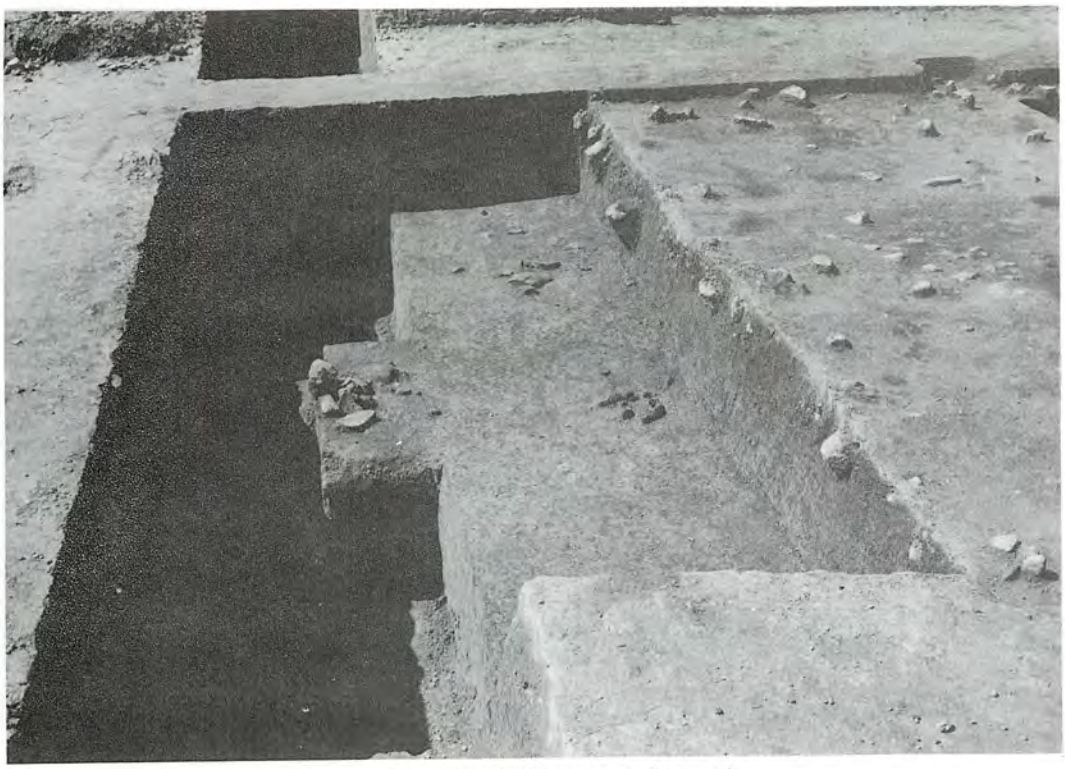
上
鏡その他

小形滑石製品



小皿

西拡大区土坑内出土遺物



上層と下層の関係が知れる（北から）

下層（東から）

西拡大区下層遺物出土状態

塚２発掘前のお祓い

塚２東トレンチ（東から）

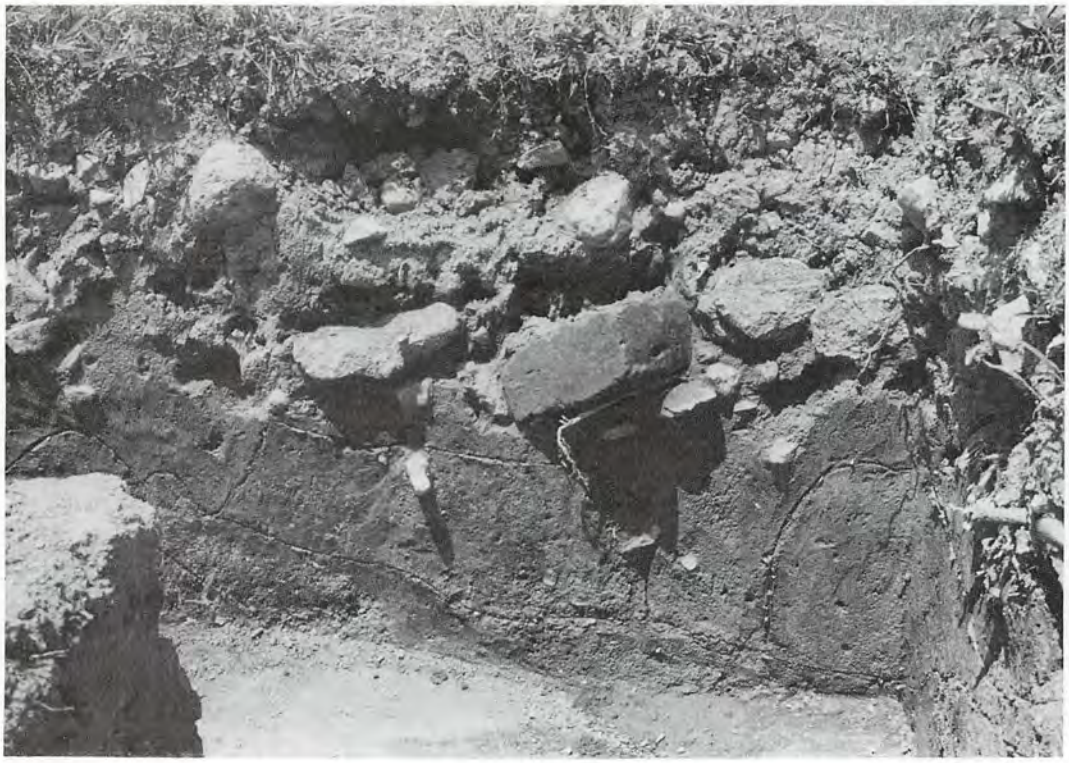
塚２の調査

東北側

西南側

塚2の発掘1

図版12



上下　土層断面にあらわれた五輪塔

塚２の発掘２

東から

北から

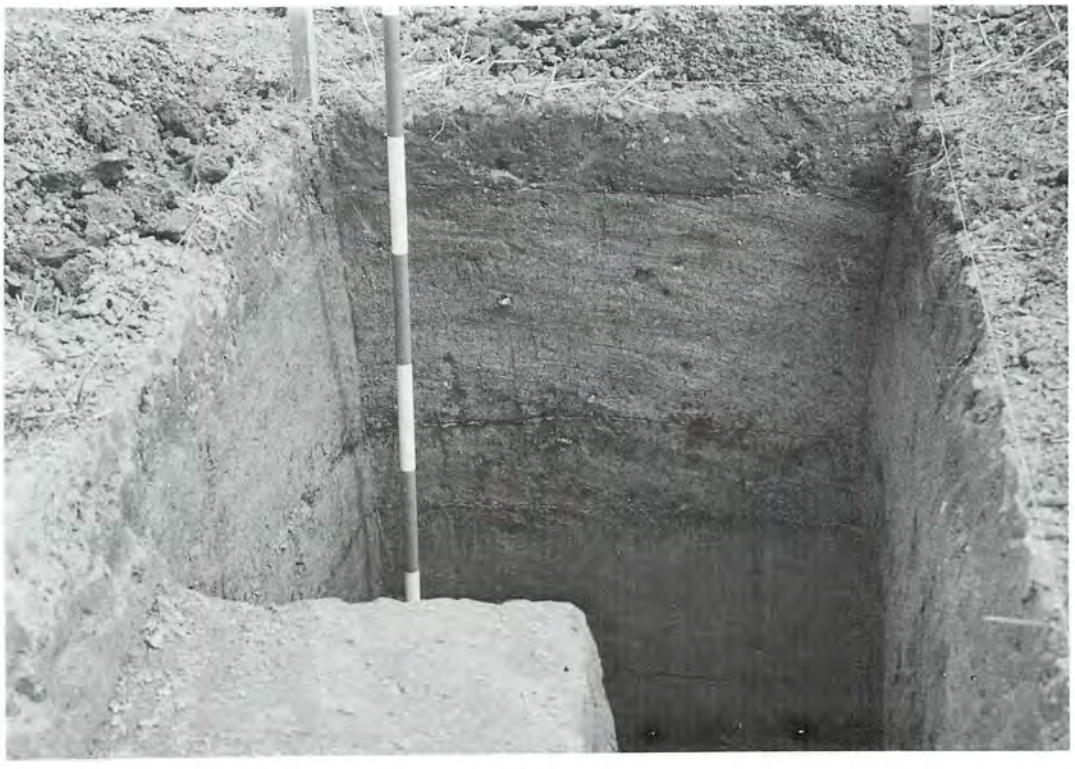
塚２の盛土下検出遺構１

図版14

1号土坑

石敷

塚2の盛土下検出遺構2



南から

東から

塚３北トレンチの土層

周辺の試掘（南から）

盛土の$\frac{1}{4}$カット状況

塚３（早馬さん）の発掘１

基底部の$\frac{1}{4}$カット

基底部の状況

塚3（早馬さん）の発掘2

図版18

発掘完了

発掘完了後の確認

塚３（早馬さん）の発掘３

青銅鏡　約0,9倍

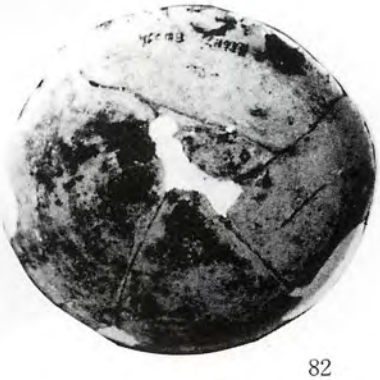
鉄器

小形滑石製品

下井手・前田遺跡出土遺物 I

78

81



82

83

下井手・前田遺跡出土遺物 2

9

14

20

23

下井手・前田遺跡出土遺物 3

図版22

15

17

18

下井手・前田遺跡出土遺物 4

27

28

29

140

下井手・前田遺跡出土遺物 5

図版24

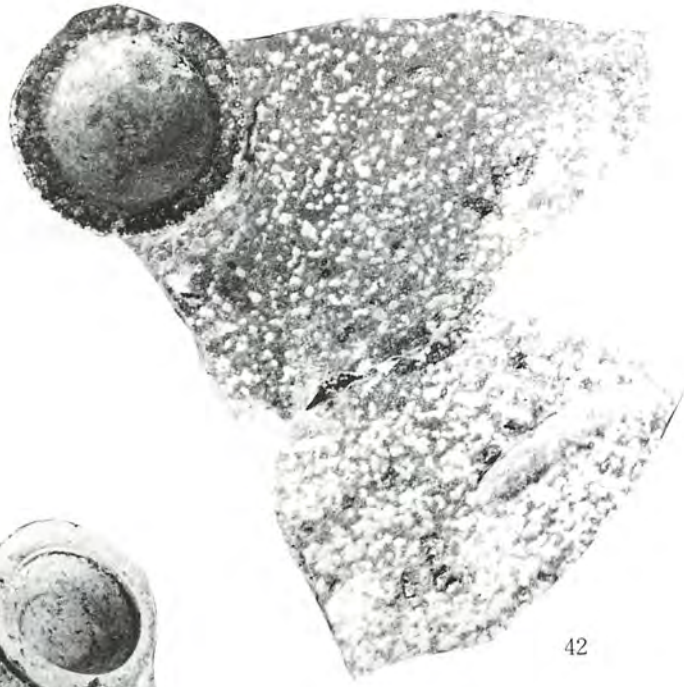
35

39

39

下井手・前田遺跡出土遺物 6

41



42

44

下井手・前田遺跡出土遺物 7

45

46

48

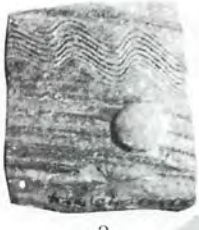
下井手・前田遺跡出土遺物 8

87

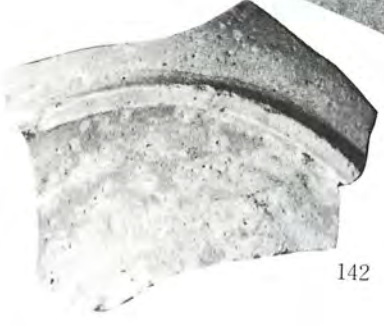
139

109

4


3

141


142

98

99

100

下井手・前田遺跡出土遺物10

49

90

94

138

下井手・前田遺跡出土遺物11

図版30

133

134

135

75

下井手・前田遺跡出土遺物12

青磁

白磁

擂鉢

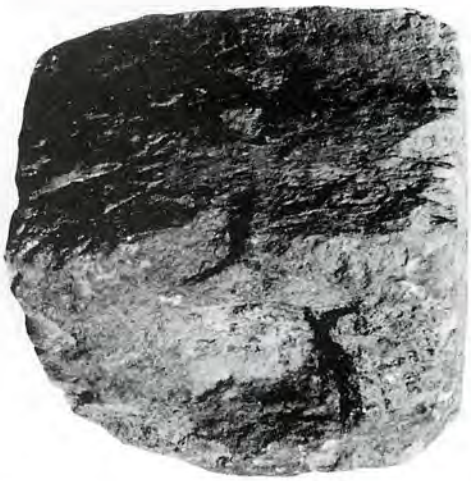
石鍋

下井手・前田遺跡出土遺物13

図版32

120

120



121

下井手・前田遺跡出土遺物14

122

123

124

下井手・前田遺跡出土遺物15

125

126

127

下井手・前田遺跡出土遺物16

129

130

128

131

下井手・前田遺跡出土遺物17

野原地区１（今寺入口）

野原地区２（公民館横）

荒尾市の早馬さん１

蔵屋地区（ぜんげじさん）

荒尾市の早馬さん 2

径　10.3cm
縁高　0.6cm
縁幅　0.1cm
重量　82g

山形県東田川郡
羽黒町
羽黒山御手洗池
出土

出水双鳥鏡　平安時代

径　19.4cm
縁高　0.3cm

千葉県佐原市
大戸
大戸神社伝来

蓬　萊　鏡　鎌倉時代（正中二年・1325）

径　11.4cm
縁高　0.8cm
縁幅　0.8cm
重量　196g

茨城県鹿島郡
鹿島町田谷出土

蓬　萊　鏡　　鎌倉時代

径　7.7cm
縁高　0.5cm
縁幅　0.2cm
重量　168g

和歌山県東牟婁郡
那智勝浦町
那智山出土

蓬　萊　鏡　　室町時代

径　10.6cm
縁高　0.7cm
縁幅　0.3cm
重量　124g

出土地不詳

蓬　萊　鏡　　室町時代（文和四年・1355）

径　11.2～11.28cm
縁高　1.0 cm
縁幅　0.3cm
重量　173.5g

下井手・前田遺跡出土

蓬萊双鳥鏡

下井手・前田遺跡

熊本県文化財調査報告　第70集

昭和59年3月25日

編　集　熊本県教育委員会

発　行　〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印　刷　新写植出版株式会社

熊本市健軍1丁目6－2

電　話　(096) 367－1606

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 70 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：下井手・前田遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/